

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 160 July 2020

新センター長から



岩下 明裕

およそ10年ぶりのセンター長復帰となりました。10年前に初めてセンター長になったときも様々な問題を抱えていましたが、大型資金の獲得や人員の立て直しなどとともに、皆さまのご支援を得て、センターはボーダースタディーズや比較地域研究などの分野にもウイングを広げ、発展することができました。

ただ今回の危機は重層的であり、とても深刻に受け止めています。第1に感染症による社会的な不安、

第2に人文社会系を中心とした日本の研究・教育活動の縮小、第3に北海道大学の総長「不在」によるガバナンスの揺らぎ及びセンターの財政、人員不足による組織運営の問題があります。

どの問題もセンターの主体的な努力だけでは克服しがたいものではありませんが、長年、地域研究を担ってきた研究拠点のひとつとして可能な限り、対応していきたいと考えています。

みなさまのご協力やご支援を引きつづきよろしく申し上げます。

研究の最前線

◆ 2020年度夏期国際シンポジウム

◀北東アジア——歴史と未来・発展と摩擦▶開催予告 ◆

スラブ・ユーラシア研究センター恒例の夏のシンポジウムの時期がやってきました。今年には新型コロナウイルスの影響もあり、開催が危ぶまれていましたが、Zoomを使ったオンライン・シンポジウムとして準備が整いました。今回のシンポジウムは、当センターが人間文化研究機構（NIHU）の「北東アジア地域研究」プロジェクトの拠点の一つとして積み上げてきた成果の報告とともに、新しくスタートした北東アジアの冷戦に関わる資料の調査と分

析に関わるセッションで組まれています。シンポジウムは日本時間の2020年7月2日と3日に開催されますが、海外からの来日が不可能という状況を考慮し、プログラムに様々な工夫をしました。

初日のセッションは、次世代を担う研究者たちによる報告を中心に据えました。さらに欧州で新型コロナがもたらした地域への影響をポーランドの研究者に報告いただき、これを北東アジア地域はどうとらえるかというテーマでディスカッションを組みました。2日目は北東アジア地域全体を貫く構造的な問題を論じた後、地域の資料をもとに国際政治を読み解くユニークなセッションが続きます。時差を考慮し、基本的に午前には北米のコメンテーター、午後には欧州のコメンテーターを招待しました。コロナ状況下での、このような少人数の会場での報告をオンラインでつなぎ、全世界の研究者と議論をするかたちのシンポジウムの開催は当センターとしても初めての試みとなります。コロナは、旧来のコミュニティに様々な境界（分断）をもたらしましたが、同時にコミュニティのなかで（を越えて）これまでとは違うかたちのつながりを私たちに予見させているようにも思います。みなさまの会議への参加を楽しみにしています。[岩下]

Northeast Asia: Pitfalls and Prospects, Past and Present

会場：オンライン開催（Zoom）使用言語：英語

Date: July 2-3, 2020

7月2日（木）

13:30-15:00

Opening Address

Akihiro Iwashita (Director, SRC) “Northeast Asia Today”

Session 1 Bottlenecks to Regional Cooperation

Part I

Moderators: Shin Kawashima (University of Tokyo) and Yoichi Isahaya (SRC)

Mihoko Kato (SRC) “Competing Sovereignties in Northeast Asia”

Naomi Chi (Hokkaido University) “Politics of (Mis)Trust in East Asia: Social Inclusion, Empathy and Reconciliation”

Commentators: Alexander Bukh (Victoria University of Wellington, New Zealand); Serghei Golunov (Institute of World Economy and International Relations, Russia)

15:15-16:30

Part II *In Collaboration with ABSj and UBRJ

Moderator: Shinichiro Tabata (SRC)

Edward Boyle (Kyushu University) & Akihiro Iwashita (SRC) “Regions, Rims, and Northeast Asia’s Borders”

Naoki Amano (Yamagata University) “Exorcising Phantoms: Development of Border Islands in Northeast Asia”

Commentators: Fuminori Kawakubo (Chuogakuin University); Tomasz Branka (Adam Mickiewicz University, Poland)

16:45-18:00

Special Lecture: “Rebordering in the EU under Covid-19: Lessons for Northeast Asia?”

Jarosław Jańczak (Adam Mickiewicz University, Poland)
Moderators: Fuminori Kawakubo & Akihiro Iwashita
Commentator: Kazuto Suzuki (Hokkaido University)

7月3日(金)

9:00-11:00

Session 2 Reconsidering the Regional Challenges

Moderators: Chisako Masuo (Kyushu University) and Naomi Chi
Yuji Fukuhara (University of Shimane) & Daesong Hyun (Korea Maritime
Institute, Korea) “Maritime Challenges within/beyond the Region”
Mitsuhiro Mimura (Economic Research Institute for Northeast Asia) “Crises for
North Korea and Its Neighbors”
Norio Horie (University of Toyama) “Chinese Land Deals and Migration in the
Russian Far East”
Commentators: Tsuneo Akaha (Middlebury Institute of International Studies at
Monterey, US); Yongchool Ha (University of Washington, US)

13:00-14:45

**Session 3: Towards a New Normal: Japan Normalizes Relations with Its
Neighbors**

Moderator: David Wolff (SRC)
Yasuhiro Izumikawa (Chuo University) “Japan’s Multiple Quests for Foreign
Policy ‘Independence’ and Soviet-Japanese Diplomatic Normalization Talks in
the 1950s”
Jong Won LEE (Waseda University) “The United States and the Normalization
of Japanese-South Korean Relations: The Process Leading to the Kim-Ohira
Memo”
Masaya Inoue (Seikei University) “From ‘Two-Chinas’ to ‘One China’: The
Normalization of Sino-Japanese Relations and the Taiwan Issue, 1969-1972”
Commentators: Togo Kazuhiko (Ambassador); Jim Hershberg (George
Washington University, US)

15:00-16:45

Session 4: Among Allies: Turning Points in the Japan-U.S. Partnership

Moderator: Yasuhiro Izumikawa
Ayako Kusunoki (International Research Center for Japanese Studies) “From the
‘Base-Lease Agreement’ to the ‘Alliance’: U.S.-Japan Security Relations in the
1950s”
Yukinori Komine (Harvard University, US) “Now We Know: Unveiling Secrecy
in the Okinawa Nuclear Deal”
Shingo Yoshida (Kindai University) “Credibility Imperatives vs. Domestic
Antimilitarism: Japan’s Alliance Policies during Détente”
Commentators: Sergey Radchenko (Cardiff University, UK) & David Wolff

16:45- Closing Remarks

◆ 第一回 NIHU-UBRJ セミナー (ZOOM) の開催 ◆

2020年度第一回目のNIHU-UBRJセミナーは、5月25日(月)に「島とボーダー:『奄美』に旅し、考えたこと」というテーマで開催しました。感染症対策のため、ZOOMを使用して配信する初の試みとなりました。本セミナーは、私が2019年10月から2020年3月まで滞在していた鹿児島大学国際島嶼教育研究センター及び奄美分室の支援による、奄美現地調査の見聞に基づく報告でした。そもそもボーダースタディーズは、空間をどのようにとらえるかの問題意識を政治地理学と共有しています。島嶼研究もまた島という空間を扱う学問ですが、「環海性」、「狭小性」、「隔絶性」、「孤立性」などといった概念をもとに島という空間を規定しようとしています。これらの概念は島を「ひとつ」としてとらえているようにみえますが、私たちはその考え方に疑問をもっています。例えば、北方領土はよく四つの島

をくくるものとして通常、語られるが、そのうちの「ひとつ」、齒舞は群島であり、本来、「ひとつ」ではない。例えば、対馬を「ひとつ」の島ととらえるのは正しいのでしょうか。上対馬と厳原という2つの空間の歴史を振り返ったとき、これにはやはり無理があるように思われます。本報告は、このようなクリティカルな問題意識から島嶼研究を脱構築し、再構築することを目的とするものでした。当日の聴講者は最大時で65名に上り、全国各地から多くの方々にご参加いただくことができました。[岩下]

◆ 北極域研究加速プロジェクト (ArCS II) の開始 ◆

このほど、北極域研究加速プロジェクト (ArCS II) (文部科学省の環境技術等研究開発推進事業費補助金)として、国立極地研究所、海洋研究開発機構、北海道大学の3機関による申請プロジェクトが採択され、6月1日から開始されました。これは、2015~2020年に同じ3機関で実施された北極域研究推進プロジェクト (ArCS)の後継プロジェクトで、今年度から5年間の実施が予定されています。ArCS IIには11の研究課題が含まれていますが、そのうちの1つが高倉浩樹教授 (東北大学東北アジア研究センター)を代表者とする「温暖化する北極域から見るエネルギー資源と食に関わる人間の安全保障」と題するものです(略称は「社会文化課題」)。この課題は、3つのサブ課題から成り、「エネルギー資源開発と地域経済」と題するサブ課題の代表者を田畑が務めることになっています。センターでは、ArCSにおいても人文・社会科学領域のテーマ「北極の人間と社会:持続的発展の可能性」を田畑が研究

代表者として実施しましたが、引き続き北極域研究の推進を担うことになりました。ArCSは、日本の大型の北極域研究において初めて人文・社会科学の研究者が参加したことが大きな特徴の1つでしたが、ArCS IIにはさらに多くの文系の研究者が参加することになり、北極域研究を文系の視点から研究することの必要性が認められた形となっています。

サブ課題「エネルギー資源開発と地域経済」では、ロシアのヤマロ・ネネツ自治管区とサハ共和国を中心に、北極域におけるエネルギー資源開発の地域経済・社会に対する影響を多角的に分析する予定です。主要メンバーは以下の方々です（50音順、敬称略）。後藤正憲（北海道大学）、武田友加（九州大学）、徳永昌弘（関西大学）、成田大樹（東京大学）、原田大輔（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）、道上真有（新潟大学）、横川和穂（神奈川大学）。[田畑]

◆ 2020年度中村・鈴川基金奨励研究員決まる ◆

2020年度中村・鈴川基金奨励研究員は以下の2名に決定しました（五十音順）[編集部]

氏名	所属	研究テーマ	予定滞在期間
五月女 颯 <small>そうとめ はやて</small>	東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程	ポストコロニアル・環境／動物批評からみるジョージア近代文学研究	2020.7.9～7.21
松本 祐生子 <small>ゆきこ</small>	東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程	戦後のソ連社会における都市祭典：建築と冷戦	2020.8.31～9.20

◆ 2020年度特任教員（外国人）決定（滞在日は未定） ◆

デブラシオ アリッサ ジェイ (DeBlasio, Alyssa J.)

所属・現職：ディキンソン大学ロシア学科准教授・主任（アメリカ）

研究テーマ：現代ロシア哲学をマッピングする

受け入れ教員：安達

メルクソー ラウリ (Mälksoo, Lauri)

所属・現職：タルトゥ大学国際法学部教授（エストニア）

研究テーマ：ロシアとユーラシアの地域的な国際法

受け入れ教員：岩下

ラドチェンコ セルゲイ (Radchenko, Sergey)

所属・現職：カーディフ大学法・政治スクール教授（イギリス）

研究テーマ：第一声：クレムリンの冷戦、スターリンからプーチンへ

受け入れ教員：ウルフ

サーヴィン イーゴリ (Savin, Igor)

所属・現職：ロシア科学アカデミー東洋学研究所上級研究員・中央アジア部門長（ロシア）

研究テーマ：中央アジアからロシアへの労働移民のアイデンティティ変容要因

受け入れ教員：宇山

[編集部]

◆ 専任・非常勤研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

3月18日：安達大輔「ゴーゴリの詩学におけるリズムの問題へ向けて」

コメンテータ：大西郁夫（北大・文学研究院）

今回のペーパーは、沼野充義氏の退職記念論文集への寄稿を予定しているもので、ゴーゴリの作品を同時代の新しい音楽理論との類比から解釈することを試みたものでした。コメンテータの大西氏はこのペーパーに対して、安達氏らしく大きなスケールでゴーゴリを解釈しようとするもので、音楽と関連させて論じるという意外性もあり、その解釈も納得できるものであると高く評価しました。その上で、いくつかの回収されていない伏線や用語の特殊性、特に音楽関連の用語の区別についての質問を提起し、その後3つのポイントとして、1) 音楽と文学の展開を並列関係として扱うことの是非、2) 議論として、中間にパレクバーゼをささむ必要性、3) 最後に出てくる「ダンス」に関する疑問を提起されました。フロアからは、文章の難解さ、繋がり分かりにくさ、議論の立て方、用語の使い方などに関する疑問が多く出されたほか、ペーパーにおける「現代」の意味、「退屈さ」の起源、タイトルとペーパーの関係などについての議論が出されました。[仙石]

3月19日：野町素己 “The Postposed Definite Markers in the Gorani Dialects of Kosovo: The Evidence from Ramadan Redžeplari’s Literary Works”

コメンテータ：Yaroslav Vladimirovich Gorbachov（SRC 外国人特別研究員）

今回のペーパーは、コソボ、アルバニア、マケドニアで話されるバルカン化したスラブ方言の一つであるゴーラ方言の後置限定詞の機能を分析するものでした。従来の方言学的な記述にとどまらず、言語類型論と歴史言語学的な視点から分析し、当該方言の後置限定詞が完全な定冠詞ではなく指示代名詞との中間的な存在で、かつ定冠詞として文法化する過程のものであることを説得的に示すものでした。分析材料として、2019年に行った方言調査での資料に加え、ゴーラ方言で執筆を行う作家・民俗学者で未刊行のゴーラ語辞典の編纂者でもあった故ラマダン・レジェプラリの散文作品を扱い、そこに見られるゴーラ方言からの様々な偏差を、類似構造を有するマケドニア語、ブルガリア語の諸方言との比較から指摘しました。全体としてコソボのゴーラ方言の実態を理論と実践の両面から明らかにする興味深いものでした。コメンテータはセンターにFVFP特任准教授として滞在中だったゴルバチョフ氏が務め、氏からは従来のバルカン言語学の空白を埋める成果として評価されました。今回の成果は昨年度の専任セミナーで報告された研究 (“The Gorani People in Search of Identity: The Current Sociolinguistic Situation Among the Gorani Community of the Former Yugoslavia”) を継続したもので、前回の社会言語学的研究よりもテクニカルな分析が目立つ展開でしたが、セミナーでの議論を通じて専門外の参加者の理解も深まりました。このペーパーを基に将来的にはバルカン諸語の比較研究として科研費プロジェクトへ発展させる構想が紹介されました。[安達]

3月24日：宇山智彦「ペレストロイカ期中央アジアにおける共和国の自立と民族問題の関係：『政治の場』の浮上と遠心化・多様化」

コメンテータ：地田徹朗（名古屋外国語大学）

今回のペーパーはロシア史研究会の大会のペーパーを元にしたもので、『国際政治』の特集号「ソ連研究の新たな地平」に掲載される予定のものです。このペーパーは中央アジアの4

つの共和国における民族紛争とその後の「共和国政治」状況の出現を多様な諸過程・諸力の相互作用としてとらえることを目的とするもので、この共和国政治の中で当初は独立運動の弱かった各共和国が次第に自決へと向かうようになり、これが独立後の指導者の権力強化とも結びついているという議論を提起するものでした。コメンテータの地田氏はこのペーパーに対して、共和国ごとのエリートの対立軸の相違、政治家とインテリとの関係、および「共和国自決」と「民族自決」の関係など、多様な論点からの議論を提起しました。フロアからは、中核民族の被害者意識と帝国崩壊との関係、抗議集会における組織のメカニズム、特にエリート・知識人・大衆それぞれの方向性のあり方、共産党エリートと地域政治との関係、インテリの役割、バルト諸国との相違など、こちらでも多面的な視点からのコメントが数多く提起されました。[仙石]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 159 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。前号で漏れていたものも含まれます。コロナ禍のため、キャンセルになったものが多いです。[大須賀]

- 1 月 28 日 北海道中央ユーラシア研究会第 135 回例会 安木新一郎（函館大学）「毛皮と貨幣から見たジョチ朝の成立」
- 2 月 20 日 北海道中央ユーラシア研究会第 136 回例会 秋山徹（早稲田大学）「遊牧英雄の末裔たちの現代史（2）：カマル・シャブダノフの生涯（1880－1948）とその位置づけをめぐる」
- 4 月 25 日 北海道中央ユーラシア研究会第 137 回例会 地田徹朗（名古屋外国語大学）「集団化前夜のカザフ人牧畜民（1928 年）：「バイ」の排除政策と牧畜民社会」（オンライン開催）
- 5 月 25 日 NIHU / UBRJ オンラインセミナー 岩下明裕（センター）「島とボーダー：「奄美」に旅し、考えたこと」（オンライン開催）
- 6 月 19 日 第 33 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 長縄宣博（SRC）「ロシア革命と中東 ある革命家の軌跡」（オンライン講演会 Zoom 会議）

人事の動き

◆ 研究員の異動 ◆

斎藤 慶子	学術研究員	3 月 31 日（退職）	
伊藤 愉	非常勤研究員	3 月 31 日（退職）	
村上 智見	非常勤研究員	3 月 31 日（退職）	
松下 隆志	非常勤研究員	4 月 1 日（採用）	
宮崎 千穂	非常勤研究員	4 月 1 日（採用）	[事務係]

◆ 事務職員の異動 ◆

笹谷 めぐみ 研究支援推進員 2020 年 4 月 1 日採用

◆ 2020 年度の客員教授・准教授 ◆

公募していました 2020 年度客員教授、客員教授・准教授は審査の結果、次の 7 名の方々をお願いすることになりました。[事務係]

客員教授

氏名	所属	研究テーマ
安達 祐子	上智大学外国語学部 教授	Continuity and Change in Russia's Business Elites: from a Perspective of Informality and Power
Golovnev Ivan	Senior Researcher, Peter the Great Museum of Anthropology and Ethnography «Kunstkamera» the Russian Academy of Science (MAE RAS)	Cinema-Atlas of the USSR as an Experience in Positioning a Multinational State
Suslov Denis	Head, Department of Economic Cooperation in Asia Pacific, Economic Research Institute (Khabarovsk), Russian Academy of Science, Far Eastern Branch	Russian Far East Development: External Conditions and Scenarios
Tsedendamba Batbayar	Research Advisor/Principal Researcher, Institute of History and Ethnology, Mongolian Academy of Sciences	Stalinism and Ethnic Mongolian Territories in the First Half of XX Century

客員准教授

氏名	所属	研究テーマ
河村 彩	東京工業大学リベラルアーツ研究教育院 助教	後期リッツキー作品のインターメディア性：写真、映画、建築
東島 雅昌	東北大学大学院情報科学研究科 准教授	中央アジア政治分析へのデータ・サイエンスの適用可能性：カザフスタンでのサーベイ実験とクルグズスタン議会議事録の定量テキスト分析
本田 晃子	岡山大学大学院社会文化科学研究科 准教授	ソ連型集合住宅とその映画内表象の研究

宣言・文字・アイデンティティ：2018 年のボスニア訪問の思い出

野町素己（センター）

目下、猛威を振っているコロナウイルスのため先行きが見えず、今年度は予定がなかなか立てられない。学会発表も現地調査も軒並みキャンセルである。その分、時間的に余裕が現れた気もするが、何か調子が狂い、その時間を生産的に使えていない日々を送っている。ただ最近、これまでしてきたこと、できなかったこと、これからしたいことなどを改めて考え直す機会にもなっているのも事実である。記録に残しておきたかったがかなわなかったことの一つとして、2018 年夏のボスニア・ヘルツェゴビナ訪問がある。今回は備忘録も兼ねて、それについて遅ればせながら書こうと思う。

ボスニア・ヘルツェゴビナを訪問したのはいくつか理由がある。一つは 2018 年の冬期シンポジウムの担当であったため、その潜在的な登壇者との意見交換や交渉を行うためである。もう一つは、同じく冬シンポジウムでの自分の報告の材料を集めるためであった。具体的にはボスニア・ヘルツェゴビナでの文字使用を示す文献や写真である。2018 年には国際スラビ

スト会議がベオグラード大学で行われたため（センターニュース 156 号を参照）、地理的に比較的近かったことも作用したように思う。

セナヒド・ハリロビッチ教授と「共通の言語に関する宣言」

第一の目的だが、サラエボ大学教授のセナヒド・ハリロビッチ教授との面会である。ハリロビッチ教授は言語学者で、主に方言学者としてキャリアを積んでこられたが、より有名になったのは 1990 年代で、セルビア・クロアチア語の後継言語の一つとなる「ボスニア語」に関する論客としてであった。1991 年に「ボスニア語」と題された著作で、その言語名称と存在の正当性を説き、賛否両論を巻き起こした（1998 年に改訂第 2 版が出ている）。1996 年には「正書法委員会」での決定をもとに「ボスニア語正書法辞典」を刊行した（2017 年にかなりの改訂をほどこした第 2 版を刊行）。2000 年には「規範文法」と考えられる「ボスニア語文法」（ジェバド・ヤヒッチ、イスマイル・パリッチと共著）を上梓している。また、ボスニア語の「規範辞典」と思いき辞典は複数あるのでややこしいが、そのうちの 1 冊で 1500 頁からなる「ボスニア語辞典」（イスマイル・パリッチ、アメラ・シェホビッチと共編著）を 2009 年にサラエボ大学出版局から刊行している。バルカン半島では、「言語」と「方言」の区別として、確立した正書法、規範文法、規範辞典を有しているかどうかが基準になることが多々ある。これは恣意的な基準ではあるが、ハリロビッチ教授はまさにボスニア語に標準形を確立し、セルビア・クロアチア語の中に埋もれたボスニアの言葉をセルビア語やクロアチア語と対等な「言語」に仕上げるさまざまな作業に参画してきたと言える。

ハリロビッチ教授に期待したのは、2017 年に旧ユーゴスラビア出身のインテリが中心に公にされた「共通の言語に関する宣言」と関連するイベントの、ボスニアでの位置づけや現状分析を冬期シンポジウムでお話していただきたかったからである。この「宣言」は、2016 年に「退屈とヒマを排除する文芸・地域の集会」という一風変わった名称の団体を主催するセルビア人小説家ウラディミル・アルセニエビッチが、旧ユーゴスラビアの（言語）学者や作家などと「言語とナショナリズム」について率直に意見交換をする公開討論会を始めたことに端を発している⁽¹⁾。アルセニエビッチの活動に直接的な影響を与えたのは、2010 年に刊行されたスニェジャナ・コルディッチの著作「言語とナショナリズム」であり、彼女自体も一連のイベントに参加し、「宣言」の草案においても重要な役割を果たしている⁽²⁾。この活動と「宣言」にいたる詳細については、セルビアの社会言語学者ランコ・ブガルスキの著作「共通語を話しますか？」（2018 年）に詳しいので、関心のある方はそちらをご覧ください⁽³⁾。

旧セルビア・クロアチア語に関わる「宣言」は、ある種の伝統的な手法で、ブーク・カラジッチやリュデビット・ガイらが中心になり、事実上「セルビア・クロアチア語」を宣言した

-
- 1 原語は *jezici i nacionalizmi* であり、複数のバルカン諸国の言語と異なるナショナリズムを指しているので「言語」も「ナショナリズム」も複数形である。これに対しコルディッチの著書は、旧セルビア・クロアチア語を主な題材として一般論を扱っているため *jezik i nacionalizam* と単数形になっている。
 - 2 「セルビア語とクロアチア語は多心的な同一言語である」と論じるこの著作はクロアチアの知識人に大きな衝撃を与えた。コルディッチ氏はそれまでも独特の毒舌に近い挑戦的な文体で、「権威」とされる民族主義的な言語（政治）学者を批判してきたため、クロアチアの学界では異端とされ、大学に職を得ることが困難であった。華のある方でメディア出演も頻繁なため、それが裏目となり、脅迫や自動車などの所有物損壊といった犯罪的な嫌がらせを数多く受けてきた。彼女の主張自体は的外れではないので私はコルディッチ氏に幾分同情的であった。2018 年 SRC 冬期シンポジウムで彼女が来日したときに比較的ゆっくり話す機会に恵まれたが、その時にコルディッチ氏の「元気さ」は黙殺されないための戦略でもあることが理解できた。穏やかな調子でクロアチア文法について討論する彼女もまた真実の姿であるように思う。

3 Bugarski, Ranko (2018). *Govorite li zajednički?* Beograd: Čigoja štampa.

1850年の「ウイーン文語協定」に始まり、それを再確認・発展させた1954年の「ノビ・サド協定」という統一的方向性の宣言が思い浮かぶが、民族言語の正当性を公にする1967年の「クロアチア文語の名称と地位をめぐる宣言」、2002年の「モンテネグロ語の公的使用に関する宣言」なども出されてきた。これら以外にも1971年の「クロアチア語を巡るサラエボ宣言」、2016年の「ボスニア語を巡るナレトバ宣言」など大小の「宣言」が様々な地域レベルでも出されている。今回の「共通の言語に関する宣言」は、セルビア人、クロアチア人、ボスニア人、モンテネグロ人の言語は共通のものであり、それは多心性であるという宣言である。旧ユーゴスラビア出身のリベラルな作家や言語学者に加え、「宣言」にはノーム・チョムスキーやピーター・トラッドギルといった著名な学者も署名したことで話題になった。ハリロビッチ氏はこの一連のイベントに関わっていなかったように見えた。ボスニア語の旗手であり、その正当性を推進してきた彼は、むしろ批判的な意見を持つだろうと私は思っていたが、それに反し、ハリロビッチ氏は「宣言」の賛同者の一人に名を連ねた。これには、上に言及したコルディッチ氏や2017年に外国人研究員として滞在し、同じく署名したセルビア人のダンコ・シプカ教授（アリゾナ州立大学）もかなり驚いた様子であった。学術的ではないかもしれないが、何が彼個人を動かしたのかという事情も知りたかった。

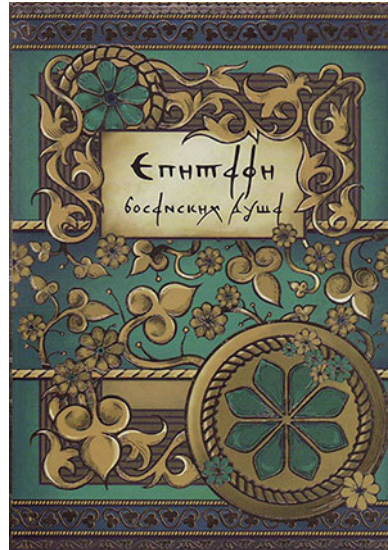
8月30日の午後1時、ハリロビッチ氏と旧市街にあるホテルのロビーでお目にかかった。「サラエボ訪問は初めてですか。きっと行きたいところは本屋でしょう」とおっしゃり、市内の大きめの本屋さんに向かって歩き始めた。私がサラエボに来たのは3回目である。初めて来たのは1997年で、まだ戦争の跡がいたるところに残っていた。アジア人は相当珍しいらしく、私の顔を見て、首がもう回らないほど振り向いて眺めて通り過ぎていく人が何人もいたのが思い出されるが、今はそういったことはない。また、当時は国連軍の兵士が闊歩し、街はずれに装甲車が目に付いた。それも今は昔である。

ハリロビッチ教授が最初に私に聞いたことは、私が文学好きかどうか、またどんな作家が好きかということであった。旧ユーゴスラビアの作家の名前を出すにしても、彼の機嫌を損ねる可能性がなくなかったと思ったので、慎重にボスニア人の作家の名前数名を出すと、「私が一番好きなのはミロシュ・ツルニャンスキです。彼は我々の言葉で執筆する詩人で最高峰だと思いますよ」と言われた。ツルニャンスキは20世紀を代表するセルビア人の詩人で、小説家としても著名である。さらに「我々の言葉」という表現でこの詩人を評したことにも、私は少し驚いたが、そのおかげで、なぜ「宣言」に署名したかも聞きやすくなった。ハリロビッチ氏は「みな誤解しているようですが、私は基本的な立場は変えていません。ボスニア人、セルビア人、クロアチア人、モンテネグロ人が話すのは一つの同じ言葉です」と穏やかにおっしゃった。突如、ハリロビッチ氏は私に後ろに振り向くように言い、「例えば、あの家の影からセルビア軍の狙撃手が私たちが狙っているとしましょう。私は90年代にそのような毎日を過ごしてきました。どうして、自分たちの言語名を、私たちの殺そうとする狙撃手の言葉の名前と同じ、敵対する民族の名前を含んだものにできるでしょうか」と言われた。これは学術的な発言ではないが、ハリロビッチ氏が戦火を経験した当事者として感じた、根底にある感情の現れとして理解できるものであった。誤解ないように付言すると、その著書「ボスニア語」（1991年）における議論は、冷静にボスニア語という名称と存在の正当化を多角的に説明しようとするのであり、「セルビア人、クロアチア人、ムスリム人、モンテネグロ人が話す共通の言語—それはスロベニアとクロアチアの国境から西はセルビアとマケドニアの国境、南と東はセルビアとブルガリアの国境にかけて広がっている—は同じ言葉ではあるが、それが完全に同一の存在ではない。」と確かに書いている⁽⁴⁾。では、なぜ「宣言」に署名したかと

4 Halilović, Senahid (1991). Bosanski jezik. Sarajevo: Biblioteka Ključanin, p.14.

聞くと「言葉とはそもそも人々をつなぐはずのものです。ところが、ボスニアでは言語によって本来同じ校庭で遊ぶはずの子供たちが別々に扱われている。差別などもそうですが、こういった分離によって何か生産的なものが出てくるとは思えませんし、お互いを理解し、尊重することにもつながりません」と落ちて言われたのが印象的であった。時間が経つにつれて、平和な日常の中で言語のより現実的な側面がより見えてきたのだろう。上記の「ボスニア語正書法辞典」の第2版では、初版でボスニア語の特徴として規範として挙げられていたアラビア語文化との繋がりを想起させる音素 /h/ の使用だが、この20年間で必ずしも定着しなかった。そういった単語の場合には、/h/ の使用を規範に無理に含めていない。

このような話をしているうちに、本屋に着いた。店員が「どんな本を探しているのか」と聞くので、私が「ボサンチツァ（ボスニア風のキリル文字）の本です」と答えると、店員は理解できず、代わりにハリロビッチ氏による「ボスニア語正書法辞典」を持ってきて、「君がボスニア語を勉強したいならね、これは絶対買わないと。なにせ有名な言語学者のハリロビッチ教授の本だから」と店員が胸を張っていった。まさか目の前に著者がいるとは知らず、ハリロビッチ氏が「私がハリロビッチです。どうもありがとう」と言うと、店員はいたく驚いていた。ハリロビッチ氏は「この人は日本人の学者で、ボサンチツァの本を探しているのですが、何かありますか」というと、店員はパソコンでタイトルを探し、本を棚から持ってきた。それが「ボスニアの魂の墓標」という本で、現在は使われないボサンチツァだけで書かれた本である。私が店員から本を受け取る前に、ハリロビッチ氏がその本を取り支払いを済ませ、「記念に持って帰ってください」と言って、私にくださった。その後、散歩を続け、旧市街に戻り、ホテルの近くのボスニア風レストランで昼食をとった。そこにはサラエボ大学で働く若手言語学者のメフメド・カルダシュ氏も同席した。カルダシュ氏は方言学者だが、近年ボサンチツァを子供に教えるワークショップなどを開いたという。このお二人とボスニア



ボサンチツァで書かれた「ボスニアの魂の墓標」



ハリロビッチ氏とサラエボの旧市街にて

人の言語観の変遷について話していると、あっという間に時間がすぎた。昼食の後、お二人にお礼を言い、ハリロビッチ氏には冬シンポでの報告内容について改めて連絡することを告げて別れた。大変残念なことに、ハリロビッチ氏はシンポジウム直前に別のお仕事で来日されなかった。したがって、「宣言」に関する彼の考えやボスニアでの言語状況について今回つまびらかにされることはなかったが、また機会を改めて訪日を約束された。いつの日か実現されることを願う。

文字は復活するか：アレビツァの場合

ボスニア訪問の第二の目的は、最近の南スラブ人の文字使用とアイデンティティの相関問題を調査するためである。これは、もともとはイェナ大学のスラブ学者であるアレクサンドラ・サラムラロビッチ氏と共同で進めてきた、最近のクロアチアにおけるグラゴル文字の再生に関する研究の延長である。2018年1月、最終調査地点のザダルからザグレブに帰るバスの中での彼女との雑談で、もしかしたら上記のボサンチツァやアレビツァ（スラブ語の音に対応させるために手を加えたアラビア文字）の再生の試みもあるかもしれない、と半ば冗談で言ったのだが、実際にそれを調べる価値があるのではないかと思い直したことに端を発する。

私の当初の考えでは、アレビツァは、イスラム世界との繋がりを示すアラビア文字を基礎に置いていて、しかもボスニアのムスリム（ボシニャク人）の宗教文化伝統を明白にし、かつセルビアやクロアチアのそれとも異なる独自性が示される。しかもこの文字は、19世紀末から20世紀中ごろまで活躍した改革者で啓蒙者のジェマルディン・チャウシェビッチによる文字標準化も経験し、20世紀前半までは公的な領域に加え、新聞など大衆向け印刷物、教科書類にも用いられたため、まだ人々の記憶にも残っているだろう。だから復活の試みがあるかもしれないと予想した。ボサンチツァは、所詮キリル文字の変種で、クロアチアでも地域的には使われていたし、キリル文字を公式の文字とするセルビア語から区別するにはインパクトが少なく、ボシニャク人がそこにアイデンティティを求めるだろうかと若干疑わしく考えていた⁽⁵⁾。



展覧会で説明をするダウトビッチ氏（写真はご本人提供）

結論から言うと私の予想は両方とも外れていたのだが、それについての具体的な内容はRoutledge社から刊行予定の論文集に譲るとして、ここでは現地調査で印象的だったことに限って書き残しておきたい。今回面会を予定していたのは二人で、サラエボのイマームであるフェリド・ダウトビッチ氏とゼニツァでデザイナーをするアミル・アル・ズビ氏であった。ダウトビッチ氏は積極的にアレビツァの再生を目指しているわけ

5 2005年に定められたセルビアの「言語と文字の公式使用にかかわる法」による。なお、ラテン文字の使用も認められている。

合ってください。

アル・ズビ氏は1977年生まれで、アラビア人の父親とボスニア人の母親の間に生まれる。1980年代はヨルダンで子供時代を過ごし、そこでアラビア語とアラビア文字を学ぶ。のちにテヘラン芸術大学に進学し、映画学とペルシャ語文化を学ぶ。この時点で、普通のボシニャク人とはバックグラウンドが大きく違う。というのは、普通ボシニャク人は宗教学校以外でアラビア語教育を行っておらず、宗教に身をささげる人以外その知識は必須ではなく、日常的に使う基本的な表現とその意味を覚えることで事足りるからである。アル・ズビ氏がアレビツァのことを知ったのは、母方の祖父が宗教学校の出身で、アレビツァによる本も多く所持していて、そこでボスニア語がアラビア文字で表現できることに感銘を受けたという。そして、アレビツァはボスニアの文化伝統の一つであり、またボスニアの子供たちにも親しんでほしいという思いから、そして言語教育で漫画を用いるのは有効な手段と考え、漫画「ハジ・シェフコとハジ・メフコ」を描いたという。当時の反響は予想以上になかったそうである。その後、アル・ズビ氏は2011年に漫画「見習いのスレイマンすなわちシェグルト・スリツァ」を子供向け雑誌に刊行し、2018年現在、ペルシャ語で執筆したボスニア出身のムスリムの作品集の絵本をアレビツァで刊行する企画があると言っていた。しかしながら、アレビツァによる執筆活動や啓蒙活動に以前より興味を失っているようでもある。なぜならば、アル・ズビ氏によると、ボスニア・ヘルツェゴビナで、あらゆるイスラムの要素がナショナリズムや紛争に関わりうることにうんざりしたからだという。



向かって左から小椋氏（東洋大学）、アル・ズビ氏、筆者
あると言っていた。しかしながら、アレビツァによる執筆活動や啓蒙活動に以前より興味を失っているようでもある。なぜならば、アル・ズビ氏によると、ボスニア・ヘルツェゴビナで、あらゆるイスラムの要素がナショナリズムや紛争に関わりうることにうんざりしたからだという。

アル・ズビ氏とのインタビューは実に快適なもので、私が知りたいことに常に明快に答えてくださった。加えて、亡くなった祖父君の蔵書の1冊であるアレビツァで書かれた「アラビア文字入門」の教科書を記念に下さり、帰国後もEメールで様々な写真や資料を送ってくださった。深く感謝したい。

管見では、アル・ズビ氏に追随するアレビツァ作家はいないようである。Facebookでは、「学校文字 (Mektebica)」というサイトがあり、そこでアレビツァの紹介がされているが、あまり活動は盛んではないようである⁶⁾。あとは、カイロで宗



3種類の文字「市長」で書かれた案内版
教学を専攻したアルディン・ムスタフィッチ氏はアレビツァによる「アラビア人の音声学観の世紀とアレビツァ」という本を2013年にベオグラードで刊行している。ムスタフィッチ氏

6 <https://www.facebook.com/Mektebica-%D8%AD%D8%A7%D8%B1%D9%81%DB%89%D9%88%D9%8A%DA%84%D8%A7-Harfovica-1421893648022473/>

によると、ボスニア語やボスニア人という範疇は人工的であり、アレビツァはセルビア文化に存在したイスラム要素の一つであり、だからこそセルビアの首都ベオグラードで著作を刊行したということである⁷⁾。ボスニアで模索されるアイデンティティとは全く別の文脈で位置付けないといけない。

では、なぜアレビツァの活動が控えめでグラゴル文字のような復権が見られないのだろうか。いろいろな理由があるだろうが、まずは形式的なインパクトがないことが挙げられるだろう。つまり、通常のアラビア文字との違いがわかりにくい。次に、アレビツァは民衆啓蒙が主眼の文字であり、ボスニア文化の過去の栄華を映し出すイメージがないのである。詳細はサラムラロビッチ氏との論文に譲るが、こういった点はむしろボサンチツァが担っているのである。グラゴル文字程ではないにしても、セルビアやロシアのキリル文字とは異なる形式を有している。しかも12世紀に書かれた、この地域初の文字資料とされる「クリン公文書」の文字はまさにボサンチツァであった。クロアチアが国を挙げてグラゴル文字をプロモートしているのと比べると、ボサンチツァもアレビツァも目下のところ個人レベルの努力を超えることは無いが、それでも過去の栄光と文化の独自性のシンボル、さらには経済的効果も目指して、古い文字への回帰が複数見られるのは、スラブ圏でも特異で興味深い現象であると言えるだろう。

7 Eメールによるインタビューに基づく。

札幌での日々

エウゲーニ・ドブレニコ(ジェフィールド大学／2019年度外国人特任教員)

私は2019年から2020年の秋学期を北海道大学のスラブ・ユーラシア研究センターで過ごした。しばらく経った今、パンデミックが始まる前に日本で仕事をできたことがいかに幸運だったかを理解している。スラブ・ユーラシア研究センターでの私の仕事は非常に実りの多いものであった。多民族的なソヴィエト文学についての新しい本のテーマに沿って計画していたことのうちの多くの事を為すことができたけれど、これは多くの点で、素晴らしい労働条件、蔵書豊かな図書館、優秀な組織とセンターで働く素晴らしい人々のお陰であった。私の札幌滞在にはとても暖かい思い出が残っている。そのうえ思い出すのは、鮮烈な印象だけではない。キャンパスに学生がおらず、とても静かな時をセンターで過ごした休日(祝日)、土曜日や日曜日(私にとっては土日もほとんど全て仕事の日だったが)さえも記憶に残った。こういった日はセンターで特によく仕事できた。

もちろん、4カ月間同じ場所にずっと滞在するのはとても退屈なものとなるかもしれなかった。しかし国内出張は日本滞在の時間を多彩な、数多くの忘れられない印象で満たしてくれた。私は2度東京を訪れた。東京工業大学と東京外国語大学で講義を行い、日本ロシア文学会の全国大会に参加した。そこでは多くの素晴らしい日本のロシア研究者と知り合うことができ、また古くからの友人である日本の研究仲間とも出会った。こうした出張の際、東京をよく知ることができ、また安達大輔氏と鎌倉に行くこともできた。京都で過ごした時間も記憶に残っている。東京から京都大学に講義に行き、親友である中村唯史氏と桶岡求美氏と魔法でもかかっているかのように美しい天橋立を訪れたことは忘れられない。こうした出張を通して、私は研究仲間と交流し、新しい友人を作り、共同研究計画を議論できただけでなく、私一人、旅行者としてでは見るができなかったであろう日本を見ることもできた。

おとぎ話のような日本の自然について分けて語りたい。私はアメリカ東海岸に住む機会があった。私が幸運にも目にすることができたこの世の自然の奇跡のうち、もっとも忘れられないものの一つがニューイングランドの秋であった。私には、これより色鮮やかで鮮やかな自然はありえないと思われた。日本の秋、特に北海道の秋を目にするまでは。これほどに花が咲き誇るさま、これほどの色彩の鮮やかさと洗練は想像することもできない。またとない多彩な彩りを、よく考えこまれた様々なエキゾチックな植物種の植え込みと幻想的



年末パーティ 皆でロシアの歌を熱唱

な景観が作りだしている。私の周りで、仕事に向う時や仕事が終わりに、用事や買い物で出歩く際に、終わりなく写真を撮るために皆がカメラを持ち歩き、通りに群れ立っているのをよく目にした。この美しさを素通りすることなどできない。私もまたしきりに写真を撮っていた。色彩と光を捉えたい思いで。そしてまた、札幌での冬、夥しい量の雪と霜氷に出会うことができたのだった。イギリスのかなり穏やかで湿っぽい冬の後で、これもまた素晴らしかった。どの季節も北海道大学のキャンパスは非常に美しく、私が来たときは緑の夏（8月）で、それからとても思いもよらない秋の色彩によって燃え、そして最後に12月、雪が積もり、まるで『くるみ割り人形』の舞台装飾のようだった。

センターでの仕事は、私に他の客員研究員—ヤロスラフ・ゴルバチョフ、ロザリヤ・ガリボヴァ、ヘンナディー・コロリョフの各氏と知り合い交友する機会を与えてくれた。彼らと大学で、またその外で多くの時間を過ごした。なにしろ、札幌の街中でも多くの興味深いことに出くわせたのだから。私たちが訪れることができたところ、それは素晴らしい植物園であり、興味深い近代美術館、忘れられない生け花の展覧会、そして最後に、キタラの壮麗なコンサートホールでのクラシック音楽のコンサートであった。クリスマスの灯の中の美しい札幌と、センターで所員たちや学生たちが催した素晴らしいクリスマスと新年のパーティーをいつまでも忘れないだろう。

私のはじめて日本を訪れたのは2006年の事であった。これは札幌と京都で2つの会議に参加するための短期間の出張であった。そのときすでに私は日本の魔法のような美しさに魅了されていた。しかし今回ははるかによく日本の美しさを経験することができた。もう旅行者としてだけでなく、人々の日々の生活を目にし、より近くで国を見て好きになることができた。このすべての事に対して私はスラブ・ユーラシア研究センターにとっても恩義がある。これまで様々なフェロウシップを受けることとなったが、大学の客員のためにこれほど素晴らしく組織されていたことはなかった。私たちそれぞれにセンターの所員があてられ、本当に様々な日常的な状況で多くのことを助けてくれただけでなく、真の友人となってくれた。安達大輔氏と野町素己氏という素晴らしい研究仲間と出会えたことは幸せであった。彼らは私の日本での生活において代えがたい補佐役であっただけでなく、真の友人となった。彼らとともに近所のほとんど全てのレストランのメニュー、おとぎ話のように素晴らしい札幌の料理を味わったり、山に登ったり、小樽に行ったり、市内を散策したりした。私は、ディビッド・

ウルフ氏のご厚意と友情、私の仕事に対する注目と関心に感謝している。センターで過ごした時間は、多大な仕事と真の暖かさ、招待側の歓待で満たされていた。私は日本を去ったが、センターとの協力を続けている。現在安達大輔氏と共に、「ソ連における社会主義リアリズムの制度化」というテーマで、センターが刊行している雑誌 *Acta Slavica Iaponica* の特別号を準備している。この特別号には、日本、ロシア、アメリカやイギリスからの研究仲間が参加している。(ロシア語から林健太訳、安達監修)

日本中央アジア学会大会オンライン開催顛末記

宇山智彦（センター）



昨年までの大会会場近くの江ノ島。島まで行く時間はほとんどなかった

日本中央アジア学会は、伊豆での合宿研究会から発展した学会で、現在でも合宿形式の年次大会を最も重要な活動としている。近年は江ノ島（正確には片瀬）を会場としていたが、2019年度大会（2020年3月21～22日）は初めて湯河原で開くことになっていた。2月まで順調に準備を進めていたが、開催期日が迫ってから、新型コロナウイルス問題の直撃を受けた。

コロナ対応の話に入る前に、こ

の学会の運営体制を簡単に説明しておこう。比較的小さい学会なので、初代の新免康会長の時には、事務局も大会も学会誌も、実質的に会長が中心になって切り盛りしていた。私が2016年に会長職を引き継いでから、学会誌に関しては編集委員長・編集幹事にほぼお任せすることにしたが、大会については3年間、実行委員長を兼ねていた。しかしこのようなやり方をいつまでも続けるのは無理があると思い、2019年度は北大経済学研究院の樋渡雅人さんに実行委員長になっていただき、若手・中堅の会員3名も加えた実行委員会を組んだ。ただし従来の大会開催方法との連続性の確保や、学会全体の運営との関係上、私も要所では関わり続けることになった。

周知の通り、日本での新型コロナ問題は2020年2月後半に緊張度を増していった。ちょうど日本中央アジア学会では初めてとなる理事選挙をメール投票で実施し、結果が出たばかりであり、私自身は別の問題への緊急対応にも追われていたが、コロナ対策もそろそろ考えなければと思っていたところ、21日に会員から、大会中止の可能性について問い合わせが来た。これを受けて23日にかけて、実行委員たちと私の間で対応をメールで検討した。報告予定者たちの報告機会を奪うことは好ましくないので中止はしないが、合宿形式は感染リスクを伴うため、東京近辺に会場を移し、懇親会もなしで大会を開こうということで意見は一致した。

ただ、東京近辺で条件のよい会場がすぐには見つからず、開催まで4週間を切っているのに会員に会場変更を告知できないという申し訳ない状態がしばらく続いた。そしてこの数日の間に、感染拡大状況の客観的な悪化を上回るスピードで、イベントなどの自粛ムードが日本社会に広がった。政府の方針は2月20日の段階では、一律のイベント自粛要請は行わないが感染機会を減らすための工夫を講じてほしいというものであり、26日になっても、「多数の方が集まるような全国的なスポーツ、文化イベント等」について、今後2週間は中止、延

期または規模縮小などを要請するというにとどまっていたが、多くの大学・研究機関等で、ごく少数の会合まで次々とキャンセルされていったのである。26日には北海道、27日には全国で小中高の休校要請が出され、政府からも危機感を高める措置が発表されていた。しかし他方で、新型コロナウイルス感染症対策専門家会議が24日に「これから1～2週間が（感染が）急速な拡大に進むか、収束できるかの瀬戸際」と述べていたこと、政府による大規模イベント自粛も2週間という期限が切られていたことから、2週間後には状況が改善すると期待する雰囲気も当時はあり、どういう基準でリスクを判断すればよいのかよく分からない状態であった。

日本中央アジア学会大会は例年40人以下の集まりなので、当時の専門家たちの知見に照らす限り、広い会場で換気を保てば、日常生活・仕事の場と比べて特に危険ではないことは明らかだと思われた。しかし社会的な雰囲気の変化に押されて、実行委員会でも、延期しようという意見が一時は多数を占めた。だが、報告予定者の大半は若手で、特に留学生の比率が高く、早期に業績を上げる必要がある人が多いと思われるうえ、近いうちに帰国する人がいる可能性も考慮すると、安易に延期を決めることはできないと私は考えた。また、それに比べれば二義的な心配ではあるが、3月に総会を開けなければ役員の改選が宙に浮いてしまうという問題もあったし、そもそも感染収束がいつになるのか全く分からない中で、無期限に延期するのは無責任だと思われた。話し合いを重ねた結果、当面は東京での開催を予定し、候補に挙がっていた2つの大学の中から選ぶ、ただし延期せざるを得ない可能性もあるので、政府の言う2週間の大規模イベント自粛の期限でもある3月11日までに最終決定する、という方針になった。それに基づいて2月29日によく、会場変更の告知を全会員に送った。その後、会場としては、東京の私立大学で108人収容の教室を無料で予約することができた。

3月に入っても新型コロナ問題の状況は悪化し続けた。そのような中で樋渡実行委員長から3月5日に、Zoomというウェブ会議システムを使って大会を開催する可能性を検討してはどうかという提案があった。3月末以降すっかりポピュラーになるZoomは、当時はまだよく知られていなかったし、オンライン会議形式で大会・集会を開くことを決めた先例は、情報処理学会のようにいかにもITに強い会員が多そうな学会に限られていたので、地域研究の学会でこれを採用できるのか、私も他の実行委員も即断できなかった。しかし参加予定者から辞退の連絡が来始める一方、中小規模のイベント開催についての明確な指針が政府などからいっこうに示されない。3月9日、開催の可否・形態を自分たちで決断しなければならないということで樋渡さんと私の方針は一致し、実行委員および公開パネルセッションの企

The screenshot shows the official website of the Japan Association for Central Asian Studies (JACAS). The header includes the JACAS logo and the text '日本中央アジア学会 THE JAPAN ASSOCIATION FOR CENTRAL ASIAN STUDIES'. Below the header, there is a navigation menu with links for 'INDEX', 'トップページ', '学会の概要', '年次大会', '日本中央アジア学会報', 'ニュースリリース', '研究会情報', and '関連サイト'. The main content area is titled '新着情報' (New Information) and features a section for the '2020年3月20日(金)' (Friday, March 20, 2020) meeting. It lists the '2019年度年次大会プログラム (最新版)のお知らせ' (2019 Annual Meeting Program (Latest Version) Notice) for March 21st (Saturday). The program includes a Zoom meeting at 13:30, a break at 13:50-14:00, and a session at 14:00-18:00 with a speaker from Tsukuba University. Below this, there are two other sessions: one on 'Uzbekistan Migration' with a speaker from Tsukuba University and a discussor from Kyoto University, and another on 'Language Learning in Kyrgyzstan' with a speaker from Saitama University and a discussor from Aichi University. The date '2020年3月22日(日)' (Sunday, March 22, 2020) is also visible.

オンラインでの大会プログラムを載せた学会ウェブサイト

画者たちの中で意見交換を始めた。同時に、数人で Zoom を試用し、なかなか快適に使えることを確認した。

意見交換では当初、オンライン会議は難しい、数か月後に湯河原で開催できる可能性を期待して延期した方がよいといった意見が出た。しかし9日夜の専門家会議の会見などで次々と発表された新しい知見を多数集めてみると、延期開催の現実性に私は疑問を持たざるを得なかった。専門家たちは新型コロナウイルスの流行が長期化する可能性を強く示唆し始めており、大会を延期しても新しい日程を設定できる見通しが立たないこと、いったん流行が収束しても、日程を再設定してから実際に開催するまでの間に再び激化しないという保証はないことが懸念された。また、開催できるような状況になれば延期されていた他の行事も再開され始めるだろうし、もともと予定されている他学会等の催しや、研究者の調査シーズンなども重なり、やはり日程の設定が難しくなるだろう。延期したまま結局中止ということになれば、年次大会を重要な活動とする学会の責任を果たせない。そこで私は10日に、延期は避け、一定の不便は承知のうえでオンライン開催を選択すべきだと提案し、実行委員・関係者に了解してもらった。すぐに会員向けの告知を作成し、外国人の会員が多い学会なので英語版も作って一緒に送信した頃には、へとへとになっていた。

3月10日の時点では、この決断に絶対の自信を持っていたわけではない。オンライン会議方式が報告者の負担にならないか、一部の人のため参加への壁にならないかという懸念があった。40人程度で広い会場に集まっても密閉・密集・密接の「3密」にならないのだから、東京で開催する方がよかったのではないかという思いもまだ若干あった。また、流行の長期化が杞憂に終わって、初夏頃に湯河原で開けばよかったのにと会員に言われるのではないかとも思った。しかしちょうどこの頃ヨーロッパで、早くから騒がれていたイタリアに限らず広域で流行が激化し、その数日後には、それまで中国と隣接していながら感染者が少数だったロシアや、ゼロだった中央アジア諸国でも感染判明者が増え始めた。日本ではなぜかその後もしばらくの間、欧米からの感染伝播への警戒が薄かったが、私はこの時点で、ヨーロッパ経由のウイルス流入は1月・2月の中国からの直接流入より危険であり、日本でも状況がさらに悪化し長期化することを確認した。また、かなり後になって分かったことだが、日本で感染判明者が最も急増したのは4月だけれども、推定感染時刻ベースで見ると新規感染者数が急激に増えたのは3月後半であり、「3密」ではなくとも全国から人が集まる催しは最も避けるべき時期だったから、東京での開催中止はやはり正解だった。

オンライン開催が決定してから大会当日まで約10日しかなかったが、スムーズな開催に向けての実行委員たちの奮闘ぶりはすばらしかった。報告者・参加者が Zoom の使用を体験してから大会に臨めるよう、4回にわたって試験開室をすることになり、あっという間に手順とスケジュールが決まった。樋渡さんが既に Zoom の使用に慣れていることが、何よりも頼もしかった。とはいえ、仮に参加人数が大幅に増えた場合にうまく運営できるのか、ネットの負荷の問題が現れないかについての確信は誰も持てなかった。そのため、公開パネルセッションの公開をやめて会員限定にする方針にいったん変わったが、既に参加の意向であった非会員の方から、何らかの手順を踏んで参加することは不可能なのかという問い合わせがフェイスブック経由で来たので、ごく短い期日で参加者を募集する方針に改めた。

結局、オンラインへの変更を理由に参加を取りやめた人はおらず、むしろ会員限定パネルも公開パネルも、従来であれば会場に来ることが難しかったような人たちから参加申し込みが来た。直前の数日間は、通常の場合と同様の慌ただしさの中で、樋渡さんを中心に試験開室が行われ、Zoom が初めてで戸惑う参加者も少なくなかったものの、ほとんどの人はミュート（音声オフ）などの基本操作にすぐに慣れた。

大会当日は、技術的なトラブルが起きないか、議論が途切れてしまわないか、緊張の連続

だった。報告者・発言者のネット環境によっては、映像（自分の顔）を映しながら話すと言声が遅れる、資料を提示しながら話すといきなり途切れるといった問題が時々生じた。後者の場合には、予め提出されていた資料を実行委員が資料共有することで対処しようとしたが、発表直前に大幅に加筆したケースもあって、なかなかうまく行かなかった。しかしそうしたトラブルは全体的には少なく、発言者以外はミュートというルールを徹底したこともあって、発表と関係のない騒音が聞こえるようなことはなかったし、議論は会場で行う場合と比べてそう劣らない活発さであった。総会も、Zoomの投票機能を一部に取り入れながら、スムーズに議事進行できた。この大会がひとまず成功したことは、他のいくつかの学会や研究会からも、先例や刺激として受け止められたと聞いている。

ただ、懇親会が開けないというだけでなく、時間内にできなかった質問を休み時間に報告者にして意見交換したり、会員同士で近況を聞き合ったり、初めて会う人と親しくなったりすることができないという意味で、大いに物足りなさが残った。実際に集まることの効用と、その際のちょっとした空き時間がコミュニケーションのために持つ意義を、改めて認識した。のち、4月に北海道中央ユーラシア研究会をオンラインで開催した際は、研究会の終了後もすぐにZoom会議室を閉じず、30分弱の雑談や自由な議論の時間を設けて、オンライン研究会の味気なさを多少は軽減できたが、それでも十分だったとは思えない。コロナ禍のような事情がある場合、学会を中止して研究を停滞させるよりは、オンラインで開いた方がずっとよいが、実際に集まって開く学会にまさるものでは決してない。

4月以降、緊急事態宣言や大学のオンライン授業など、コロナ対応による多くの新しい経験が生まれた。オンライン会議が日常化した今の眼から見れば、日本中央アジア学会大会のオンライン化の決定過程には、迷わずにもっと早く決断できたはずだという部分もあるかもしれない。しかし未知の感染症が出現し、どういう対処が正解なのか見えないまま状況が毎日変わっていく中で、単なる自粛ムードに流されるのではなく、できる限り広く情報を集め、さまざまな選択肢のプラスマイナスを検討しながら意思決定をした記録を残したいと考えて、この小文をしたためた。オンラインでの大会開催でお世話になった皆様に感謝申し上げますと共に、来年3月には湯河原で大会を開催し、会員たちの議論と親睦を深められるようになることを願ってやまない。

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

- 2020年7月2-3日 スラブ・ユーラシア研究センター 2020年度夏期国際シンポジウム
- 10月17-18日 ロシア・東欧学会 2020年度研究大会 於北海道大学
<https://www.jarees.jp>
- 10月23-25日 日本国際政治学会 2020年度研究大会 「オンライン開催」
<http://jair.or.jp>
- 10月31日 2020年度内陸アジア史学会大会 於早稲田大学
<http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/>
- 10月31日-11月1日 日本ロシア文学会 2020年度全国大会 於大阪大学 <http://yaar.jpn.org>
- 11月28日-29日 第60回比較経済体制学会全国大会 於西南学院大学 <http://www.jaces.info/info.html> 「当初予定の6月から延期」
- 11月5-8日 52nd Annual ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention 於ワシントンDC <https://www.aseees.org/convention>

11月14-15日 ロシア史研究会 2020年度大会 於岡山大学津島キャンパス

<https://www.roshiashi.com>

前号掲載の学会行事のうち、本年4月に予定されていた The ABS (The Association for Borderlands Studies) 2020 Annual Conference と BASEES Annual Conference 2020 は中止され、6月の日本比較政治学会第23回研究大会は書面・オンライン開催となりました。

8月に予定されていた ICCEES 第10回大会は2021年8月に、10月に予定されていた 21st Annual CESS Conference は2021年10月に延期されました。

他の学会についても、延期や開催形態の変更があり得ます。

[編集部]

大学院だより

北海道大学大学院文學院人文学専攻スラブ・ユーラシア学講座には、修士課程3名と博士課程2名の入学がありました。今年度の大学院生は以下の皆さんです。[長縄]

2020年度スラブ・ユーラシア学講座大学院生名簿

学年	氏名	研究題目	指導教員	副指導教員	
D3	小野瑞絵	旧ソ連圏におけるイスラーム教育と政策の比較	宇山	長縄	仙石
D3	生熊源一	戦後ロシア美術	安達	野町	ウルフ
D3	寺岡郁夫	ウクライナの構成地域とその形成過程	岩下	宇山	田畑
D3	林健太	ピョートル1世時代の官僚出版業と国家出版言語	長縄	野町	安達
D3	ミルラン・ベクトゥルスノフ	ソヴィエト・キルギスの形成：中央政権と現地人エリート	宇山	長縄	ウルフ
D3	中尻恒光	ロシアにおけるマクロ経済政策に関する研究	田畑	仙石	岩下
D2	ヴィクトリア・アントネンコ	19世紀と20世紀におけるサハリンと日本との経済関係	ウルフ	田畑	長縄
D2	上村正之	19世紀ロシア文学上のコサック・イメージ	安達	宇山	野町
D1	長島徹	ロシアの国籍政策	岩下	宇山	田畑
D1	布日額 (ブレン)	清朝末期モンゴルのナショナリズムと日露両帝国	宇山	ウルフ	長縄
M2	唐牛健成	ロシア極東における対日歴史観の変遷に関する研究	岩下	ウルフ	
M2	松元晶	映画にみるウズベキスタン	宇山	安達	
M2	王雨寒	歴史と変遷：ウイグル人の中央アジアへの移住及び文化の適応	宇山	長縄	
M2	王釗	中国とロシアの石油産業	田畑	仙石	
M2	小太刀雄海	フェルガナ盆地の灌漑	宇山	長縄	
M2	蔣政倫	2015年以降ロシア極東経済特区における投資と国際協力	田畑	仙石	
M2	費宇澄	ゴルバチョフと鄧小平の経済政策の比較	田畑	仙石	
M1	陳屹文	ロシアの金融産業グループについて	田畑	仙石	
M1	辻本玲央	16-17世紀モスクワ国家辺境における修道院の機能	長縄	野町	

M1	李暢	1920年代の満洲におけるロシア人	長縄	ウルフ	
研究生	鄭米芝 (ジョン・ミジ)	競争的権威主義における選挙制度、市民社会、メディア	宇山		

編集室だより

◆ ACTA SLAVICA IAPONICA ◆

さまざまな不運が重なり発行が著しく遅れていた40号ですが、この5月に無事刊行されました。論文13本、書評7本で合計305頁、ASIの37年の歴史で最も厚い号になりました。内容につきましては、センターサイトの該当箇所 (<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicnt/index2.html>) をご覧ください。なお、今回の編集作業では大須賀氏に加え、共同研究員の藤森信吉氏にも大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。なお41号も上半期に刊行が予定されています。42号の投稿締め切りは7月15日ですので、ふるってご投稿ください。[野町]

◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第67号は6本の投稿のうち、以下の力作を掲載することになりました。現在、校正作業が進行中です。お待たせして申し訳ございません。

論文

- 伊藤愉 ロシア演劇学の誕生：レニングラード学派とメイエルホリド
 伊丹聡一郎 ペルミのステファンと14世紀モスクワにおける聖俗両権
 ヤロスラフ・シュラトフ ロシア革命とサハリン：日露関係から日ソ関係へ（1917-1922年）
 大平陽一 ブラハ言語学サークルにおける機能の概念

研究ノート

- 石井優貴 ソヴィエト音楽にふさわしいジャンルとしての室内楽：1940-1947年のスターリン賞委員会における室内楽曲の選考過程

丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様にお礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。次の第68号の原稿締め切りは、2020年8月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。なお、次号についても引き続き、ハードコピーの提出先はセンターの長縄宛に、電子ファイルは slavicstudiessrc@gmail.com にお送りください。[長縄]

◆ EURASIA BORDER REVIEW ◆

2019年秋に *Eurasia Border Review* Vol. 10, No. 1 が発行されました。[岩下]

From the Editors

<Article>

- Naoki Amano Karafuto as a Border Island of the Empire of Japan: In Comparison with Okinawa
 Maya Daurio and Mark Turin “Langscapes” and Language Borders: Linguistic Boundary-Making in Northern South Asia

<Research Note>

Hope Dewell Gentry and Regina Branton The Impact of Intergroup Contact and Intergroup Conflict on Japanese Immigration Attitudes

<Conference Report>

Machteld Venken, Astrid M. Fellner, Adriana Dorfman, Jussi Laine, Daniel Meier, Laurie Trautman, Dhananjay Tripathi and Wolfgang Zeller Border-Making and Its Consequences: A Global Overview

<Special Section on Russo-Chinese Relations and Northeast Asia>

David Wolff Introduction to EBR Special Section on Russo-Chinese Relations and Northeast Asia

Akira Ishii How Has Chinese-Russian Partnership Been Constructed? A Historical View

Norio Horie Contested Space in the Russian Far East: Land and Migration along the Russo-Chinese Borderlands

Olga Zaleskaia The Struggle for Power and Leadership in the Far Eastern Frontier in 1917-1922: Northeast China as a Recipient Region of the Russian White Movement

Akihiro Iwashita Abe's Foreign Policy Fiasco on the Northern Territories Issue: Breaking with the Past and the National Movement

<Review>

Christopher Len Paul B. Richardson, *At the Edge of the Nation: The Southern Kurils and the Search for Russia's National Identity*, University of Hawai'i Press: Honolulu: 2018, 264 p., ISBN: 978-0-8248-7262-5

◆ 『境界研究』 ◆

2020年春に『境界研究』No. 10が発行されました。[岩下]

≪論文≫

峯田史郎 東南アジア境界地域における武力闘争へのマルチスケールと人間の領域性からの接近：ミャンマー・シャン州南部少数民族組織の生存戦略

水谷裕佳 地理的境界と展示活動：ワイキキ水族館における環境と文化の展示を事例として

中山大将 日ソ戦後の在南サハリン中華民国人の帰国：境界変動による樺太華僑の不本意な移動

新津厚子 境界の美的感性「ラスクアチスモ」とその可能性：チカーナ／チカーノの日常の諸表現から

≪研究動向≫

森下稔 ボーダースタディーズに出会った比較教育学の研究動向

≪ディスカッション≫

塩原俊彦 サイバー空間とリアル空間における「裂け目」：知的財産権による秩序変容

会 議 (2020年4月～5月)

◆ センター協議員会 ◆

2020年度第1回4月27日(火)～5月8日(金) [メール開催]

議題 1. 教員の人事について

2020 年度第 2 回 5 月 11 日 (月) ~ 12 日 (火) [メール開催]

議題 1. 教員の人事について

2020 年度第 3 回 5 月 12 日 (火) ~ 15 日 (金) [メール開催]

議題 1. 教員の人事について

[事務係]

誰が何をどこで

2019 年度 (4 ~ 3 月) の専任研究員、助教、客員教員、非常勤研究員、学術研究員の研究成果・研究余滴のアンケート調査 (提出は任意) を以下のようにまとめました。[五十音順] [大須賀]

秋山徹 ① 1 学術論文 ▼遊牧英雄のリアリズム：近代をきたあるクルグズ首領一族の生存戦略 (小松久男、野田仁編『近代中央ユーラシアの眺望』74-96, 山川出版社, 2019) ② 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼スプートニク・クルグズスタンにおけるインタビュー記事 “Я добывал сведения о Шабдан баатыре в четырех странах – историк из Японии” [<https://ru.sputnik.kg/society/20190511/1044293695/kyrgyzstan-shabdan-baатыr-tehcu-akiyama-zhanyl-abdyldabek-kyzy-uchenyj-istoriya.html>] (2019.5.11) ③ 5 学会報告・学術講演 ▼ Development of a Realism-Based Risk Distribution Strategy: Focusing on the Survival Strategy of a Kirghiz Chieftain Family, The 16th Biennial Conference of the European Society for Central Asian Studies (ESCAS), University of Exeter, UK (2019.6.28) ▼ Reconsideration of the Building Process of Soviet Kyrgyzstan from the Family History of a Descendants of a Tribal Chieftain: 1916-1956, The 10th East Asian Conference of Slavic Eurasian Studies, The University of Tokyo, Japan (2019.6.30) ▼ At the Foot of the Sulayman Too Sacred Mountain: The Experience of Osh City as a Showcase of Migration Issue in Contemporary Central Asia, UBIAS Topic of the year 2019 event “Migrations: Movement of People, Ideas, and Goods” Waseda University, Tokyo, (2019.10.7) ▼露領中央アジア遊牧系軍事エリートの次世代育成, 高等研究所セミナーシリーズ「新しい世界史像の可能性」公開講演会, 早稲田大学 (2020.1.11)

安達大輔 ① 1 学術論文 ▼ Гоголь и мелодрама (к постановке проблемы), Филологічні науки, 31:5-11 (2019) ▼身体と観察：センチメンタリズム文学における自殺の詩学『日本 18 世紀ロシア研究会年報』16:8-23 (2019) ② 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 (エッセイ) ▼第 14 回ゴゴリ研究会 (ポルタワ) に参加『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』157:20-22 (2019) ③ 4 その他業績 (事典項目) ▼余計者、ゴゴリ (沼野充義、望月哲男、池田嘉郎編集代表『ロシア文化事典』366-367, 384-385, 丸善出版, 2019) ④ 5 学会報告・学術講演 ▼ Irony and the Melodramatic Imagination in the Poetics of Gogol, The 4th Russian-Japanese Scientific Forum, Moscow State University, Moscow (2019.9.24) ▼ Gogol’s Melodramatic Imagination, The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, University of Tokyo, Tokyo (2019.6.30) ▼ Гоголь и мелодрама, XIV Гоголівські читання, Національний музей-заповідник М.В. Гоголя, с. Гоголеве (2019.4.1)

諫早庸一 ① 1 学術論文 ▼ (Nathan Sidoli と) Naşir al-Dīn al-Ṭūsī’s Comments on Euclid’s Data, *Historia Mathematica* 47:87-105 (2019) ▼天文学から見たユーラシアの 13 世紀 ~ 14 世紀：文化の軸としてのナスィール・アッディーン・トゥーサー (1201 ~ 1274 年) 『史苑』79(2):88-114 (2019) ▼ Sino-Iranica in Pax Mongolica: The Elusive Participation of Syriac-Rite Christians in the Ilkhanid Translation Project (Rong X. & Dang B., eds., *Marco Polo and the Silk Road (10th-14th Centuries)*, 341-362, Beijing: Peking University Press, 2019) ▼ The Mongol Impact on Astronomy: The Differentiation of Astronomy in the Eastern and Western Islamicate World (Faghfoory & K. O’Brien., eds., *Voices of Three Generations: Essays in Honor of Seyyed Hossein Nasr*, 333-349, Chicago: Kazi Publications, 2019) ② 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ (小澤実と) ウィーン発の中世グローバルヒストリー：ヨハネス・プライザー = カペラー博士連続講演会『史苑』80(2):114-134 (2020) (5) その他 ▼ M.E.S.S. 2019 “Religions in Mongol Eurasia” 参加記『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』157:22-25 (2019) ▼ SRC Special Lecture, “New Rome in a Larger World,” by Dr. Preiser-Kapeller, *Slavic-Eurasian Research Center News* 26:6-10 (2019) ▼北海道中央ユーラシア研究会 1 月例会『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』159:15-20 (2020) ▼もうひとつの「天文対話」：モンゴル帝国期ユーラシアにおける 2 つの天文学の邂逅『なじまあ—Accessible Asia—』10:22 (2020) ③ 5 学会報告・学術講演 ▼ From Alamūt to Marāgha: Religious Polarization and Scientific Commonalization, Mongol Empire Spring Series M.E.S.S. 2019 Workshop “Religions in Mongol Eurasia,” Vienna: University of Vienna (2019.5.15) ▼「14 世紀の危機」についての環境史的考察の試み, 日本地球惑星科学連合 2019 年大会セッション「歴史学×地

球惑星科学」, 幕張メッセ (2019.5.27) ▼ Maragha across the Euphrates: The Observatory in Mamluk Sources, The Sixth Conference of the School of Mamluk Studies “Mamluks and Asia: Views from the East.” Tokyo: Waseda University (2019.6.16)

岩下明裕 ❶ 1 学術論文 ▼ Abe’s Foreign Policy Fiasco on the Northern Territories Issue: Breaking with the Past and the National Movement, *Eurasia Border Review*, 10:111-133 (2019) ❷ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 主権と領土問題『現代地政学事典』144-145 (2020) ▼ (川久保文紀と共著) ボーダースタディーズとは何か『現代地政学事典』548-549 (2020) ▼ 中露善隣友好協力条約『現代地政学事典』654-655 (2020) ▼ 陸のフィフティ・フィフティ: 中国とロシアの国境画定『現代地政学事典』694-695 (2020) (5) その他 ▼ ボーダーの魅力や資源を社会と共有『週刊金曜日』1243:17-19 (2019.8) ▼ 戦争で領土問題を解決できるか, web 論座 (2019.5) <https://webronza.asahi.com/politics/articles/2019051600008.html> ❸ 3 著書 ▼ 『世界はボーダーフル』64 (北海道出版会, 2019) ▼ (高木彰彦、山崎孝史、川久保文紀、古川浩司他と共編著)『現代地政学事典』888 (丸善出版, 2020) ❹ 5 学会報告・学術講演 ▼ Bridging the Borders: Case of Border Tourism in Eurasia, Association for Borderlands Studies Convention, San Diego (2019.4) ▼ 比較教育学におけるボーダースタディーズの可能性, 日本比較教育学会年次大会, 東京外国語大学 (2019.6) ▼ Russo-Japanese Relations, Finland and Japan in the Changing World, トウルク大学 (2019.8) ▼ Japan-Russian Relations, Erasmus Plus Project, アダム・ミツケヴィチ大学 (2019.8) ▼ Border Tourism in Northeast Asia: In Case of Japan’s Tryout on the Sino-Russian Borderlands, CASS Forum 2019: The Belt and Road Initiative and Regional Development and Cooperation in Northeast Asia, 延辺大学 (2019.11) ▼ What Are Eurasian Studies? 上海外語大学設立 70 周年記念シンポジウム「地域研究: 国際研究者の対話」, 上海外語大学 (2019.12) ▼ Abe’s Foreign Policy toward Russia, 中露関係とユーラシア地域秩序メカニズム, 上海外語大学 (2019.12) ▼ 日本と韓国は北東アジアの危機にどう向き合うべきか, 北東アジアをめぐる日韓の対話, 韓国中央大学 (2020.1) ▼ ボーダースタディーズと島嶼研究, 国際島嶼教育研究センター第 201 回研究会, 鹿児島大学 (2020.1) ▼ ボーダーツーリズムを奄美でつくろう, 第 29 回奄美分室で語りましょう, 鹿児島大学奄美分室 (2020.1)

宇山智彦 ❶ 1 学術論文 ▼ 近代帝国間体系のなかのロシア: ユーラシア国際秩序の変革に果たした役割 (秋田茂編『グローバル化の世界史 (MINERVA 世界史叢書 2)』211-240, ミネルヴァ書房, 2019) ▼ カザフスタンのナザルバエフ「院政」: 旧ソ連諸国における権力継承の新モデル? 『ロシア NIS 調査月報』43-56 (2019.6) ▼ カザフ知識人とイスラーム: 遊牧民社会の近代化の方向性をめぐって (野田仁、小松久男編著『近代中央ユーラシアの眺望』97-116, 山川出版社, 2019) ▼ Why in Central Asia, Why in 1916? The Revolt as an Interface of the Russian Colonial Crisis and the World War (Aminat Chokobaeva, Cloé Drieu, and Alexander Morrison, eds., *The Central Asian Revolt of 1916: A Collapsing Empire in the Age of War and Revolution*, 27-44, Manchester: Manchester University Press, 2019) ▼ Идея и реальность казахского автономизма в годы Гражданской войны в России: самостоятельность и зависимость народов в квази-имперском пространстве (*Гражданская война на востоке России (ноябрь 1917 – декабрь 1922 г.)*, 376-387, Новосибирск: Изд-во СО РАН, 2019) ❷ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ [エッセイ] 中央アジア 1916 年反乱に関する国際共同研究に参加して『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』158:7-12 (2019) ▼ [事典項目] ロシアと旧帝国諸民族①中央アジア (沼野充義、望月哲男、池田嘉郎編集代表『ロシア文化事典』676-677, 丸善出版, 2019) ▼ [事典項目] ロシアのクリミア併合; 中央アジア (現代地政学事典編集委員会編『現代地政学事典』46-47; 630-631, 丸善出版, 2020) ▼ [インタビュー] На данный момент внешняя политика КР стала более сбалансирована, чем при А. Атамбаеве. Тем не менее пока не находится страны, готовой существенно помочь Кыргызстану, *Общественный рейтинг* (2019.6.13) <<http://www.pr.kg/gazeta/number836/3544/>> ❸ 5 学会報告・学術講演 ▼ Authoritarianism and Nationalism in Central Asia: Do Political Regime and Foreign Relations Correlate?, Summer International Symposium “Global Crisis of Democracy? The Rise and Evolution of Authoritarianism and Populism,” SRC (2019.7.4) ▼ 中央アジア近現代史から見る比較帝国論: 協力/抵抗論の脱ドグマ化のために, 北大史学会大会講演, 北海道大学 (2019.7.20) ▼ The Russian Empire’s Attitudes toward Its Non-Russian Subjects: Between Particularism and Russian Nationalism, The 21st Broadyard Workshop “Russia’s Choice of Approaches to State-Building: Past and Present,” Institute of Area Studies, Peking University (2019.9.5) ▼ Regionalism and Universalism in Japanese Foreign Policy: Implications for Central Asia, lecture at the American University of Central Asia (2019.9.17) ▼ Регионализм и универсализм во внешней политике Японии: импликация для Центральной Азии, лекция в Бишкекском Государственном Университете им. К. Карасаева (2019.9.19) ▼ ベレストロイカ期の中央アジアをどう見るか: 「政治の場」としての共和国の自立における紛争の役割, ロシア史研究会大会共通論題, 大東文化大学 (2019.9.29) ▼ Authoritarianism and Nationalism in Central Asia: Do Political Regime and Foreign Relations Correlate?, Central Eurasian Studies Society Annual Conference, George Washington University (2019.10.11) ▼ Japanese Policies in Central Asia:

Regionalism, Universalism, and Geopolitics, Scholarly Intersections Seminar at the Departments of History and Asian & Asian American Studies, California State University Long Beach (2019.10.14) ▼日本にとっての中央アジア, JICA 北海道主催シンポジウム「中央アジア諸国とのビジネスの可能性」, 北海道大学 (2019.11.8) ▼Идея и реальность казахского автономизма в годы Гражданской войны в России: самостоятельность и зависимость народов в квази-имперском пространстве, Всероссийская научная конференция с международным участием “Гражданская война на востоке России (ноябрь 1917 – декабрь 1922 г.),” Новосибирский государственный университет (2019.11.18) ▼Unite and Discriminate: Paradox of Nationalizing Empire in Russian Central Asia, Annual ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention, San Francisco (2019.11.26) ▼比較政治学における中央アジア研究の成果・可能性・課題, 日本中央アジア学会大会公開パネル, オンライン (2020.3.22)

ウルフ・デイビッド (David Wolff) ① 1 学術論文 ▼ Praviashchie krugi Iaponii v poiskakh russkoi klientury (vesna 1918 goda) (*Grazhdanskaia voina na vostoke Rossii (noiabr' 1917 – dekabr' 1922)*), 356-365, Novosibirsk, 2019) ▼ Introduction to EBR Special Section on Russo-Chinese Relations and Northeast Asia, *Eurasia Border Review*, 10(1):71-76 (Fall 2019) ① 3 著書 ▼ (編著) Special Section on Russo-Chinese Relations and Northeast Asia, *Eurasia Border Review* 10(1):71-133 (Fall 2019) ① 5 学会報告・学術講演 ▼ Channels of Intercultural Communication, *Global Conversations: Cross-Fertilization of Knowledge in the Making of the Modern World*, German Historical Institute, Berlin (2019.4.27) ▼ Russia's Great War and Revolution in Northeast Asia: New Findings and Interpretations, Ludwig Maximilians Universität, Munich (2019.4.30) ▼ Russian Collective Biography on the Way from China to Australia: Cold War Inflections at “China” Russians as Postwar Migrants to Australia, University of Sydney, Australia (2019.11.8) ▼ East Looks West: Slavic Studies in East Asia, ASEES, San Francisco (2019.11.24) ▼ Among Great Powers: Sino-Russian Relations in Recent Years, Fairbank Center for Chinese Studies, Harvard University [<https://fairbank.fas.harvard.edu/events/david-wolff-critical-issues-confronting-china-series/>](2020.3.4)

大串敦 ① 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ウクライナ大統領選：圧勝の背景『世界』922:18-22 (2019.7) ① 5 学会報告・学術講演 ▼プーチンのグランド・ストラテジー？：ロシアの紛争介入を事例として, 日本国際政治学会 (2019.10) ▼Russian Deputy Ministers: Patrimonial or Technocratic Elites? International Symposium of the SRC, “Global Crisis of Democracy? Rise and Evolution of Authoritarianism and Populism,” SRC (20019.7) ▼ Toward a Party System Collapse? Chaotic Elite Realignment in Ukraine, The 10th East Asia Conference on Slavic Eurasian Studies, University of Tokyo (2019.6)

加藤有子 ① 1 学術論文 ▼世界共通言語の探求：ポーランド未来派マニフェストと「パリを焼く」にみるブルーノ・ヤシェンスキの言語観『ロシア・東欧研究』47:35-53 (2019.7) ▼Znaczkzi, mapa i władca. Postkolonialna wizja Brunona Schulza, *Konteksty* 2019(1-2):175-178 (2019.10) ▼Tłumaczenie „Akacje kwitną”: Debory Vogel na język japoński. Pokusy i trudności, *Konteksty*, 2019(1-2):169-174 (2019.10) ① 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ノーベル文学賞 2 氏の魅力：中欧の辺境から世界再構築—オルガ・トカルチュクさん『読売新聞』23 (2019.10.14) ▼第 8 回国際ブルーノ・シュルツ・フェスティバル：ブルーノ・シュルツ受容の現在『スラヴ学論集』22:282-288 (2019.4) ① 3 著書 ▼ (共著) Dialekty i kobiety w powojennej literaturze japońskiej. Powieść Raj w morzu smutku Mihiko Ishimure i inne (Piotr Śliwiński, ed., *Dyskursy, w dyskursach. Szkice o krytyce i literaturze lat ostatnich* [Wielkopolska Biblioteka Poezji 39] 78-91, Poznań, 2019.12) ① 5 学会報告・学術講演 ▼ (招待講演) Dialekty i kobiety w powojennej literaturze japońskiej. Powieść Raj w morzu smutku Michiko Ishimure i inne, Festiwal “Poznań Poetów” Poznań, Poland (2019.5.17)

加藤美保子 ① 1 学術論文 ▼「東方シフト」のなかの方向転換：米ロ対立化のロシアの東方政策と地域秩序へのインパクト『ロシア・東欧研究』48:1-18 (2020) ▼ロシアの国際秩序構想：孤立の克服から東方シフトへ (佐橋亮編『冷戦後の東アジア秩序：秩序形成をめぐる各国の構想』227-253, 勁草書房, 2020) ▼“Sinocentrism” in Russia's Reorientation to the East: Re-examining Russian Foreign Policy under the Third Putin Administration (2012–2018), *Chung-Ang Saron*, 49:115-154 (2019) ① 5 学会報告・学術講演 ▼「東方シフト」のなかの方向転換：地域秩序から考えるアジア・太平洋のロシア, ロシア・東欧学会 2019 年研究大会共通論題「ユーラシアにおける地域秩序の変動：ロシア・東欧とアジアからのインパクト」政治・外交編, 慶應義塾大学三田キャンパス (2019.11.10) ▼ロシアはアジア地域秩序の挑戦者か？—日米同盟観の変化に着目して, 日本国際政治学会 2019 年度研究大会/分科会 (東アジア), 朱鷺メッセ, 新潟市 (2019.10.20) ▼ロシアと朝鮮半島の接近：大国外交と地域開発の狭間で, 北東アジア学会第 25 回学術研究大会「朝鮮半島情勢と北東ア

ジア域内連携の緊密化」, 信州大学 (2019.9.29) ▼ “Pacific Russia” and the Security Architecture in the Asia Pacific Region, ISA Asia Pacific Conference 2019, Nanyang Technological University (2019.7.7) ▼ North Korean Policy under the Putin Administration: Prospects and Challenges, The 1st International Joint Conference between RCCZ and UBRJ “Macro-Micro Relations in East Asia and Contact Zones: Regime-Crevice-Hybrid in East Asia’s Relations,” Chung-Ang University (2019.4.12)

清沢紫織 ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 1920 年代におけるロシア語及びベラルーシ語のラテン文字化: 文字表記化プロセスをめぐるメタ言語言説の比較から, 日本ロシア文学会第 69 回大会, 早稲田大学 (2019.10.27) ▼ The Image of Trasianka in the Russian Translation of Haruki Murakami’s “Yesterday”: Rethinking the Sociolinguistic Stigma on Belarusian-Russian Mixed Speech in Fiction Works, The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 東京大学 (2019.6.30)

後藤正憲 ㊦ 1 学術論文 ▼ (中田篤、飯島慈裕と共著) 第 4 章 凍土と文化 (田畑伸一郎、後藤正憲編『北極の人間と社会: 持続的発展の可能性』[スラブ・ユーラシア叢書 14], 1-13, 北海道大学出版会, 2020) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ (田畑伸一郎と) 持続的発展を目指して (田畑伸一郎、後藤正憲編『北極の人間と社会: 持続的発展の可能性』[スラブ・ユーラシア叢書 14], 95-121, 北海道大学出版会, 2020) (4) 翻訳 ▼ エヴァ・リーシナ『シェニヤル村の子どもたち』(群像社, 2019) ㊦ 3 著書 ▼ (田畑伸一郎と共編著)『北極の人間と社会: 持続的発展の可能性』296 (北海道大学出版会, 2020) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Rearranging Opposition in Sakha Stock-raising, Arctic Science Summit Week 2019, Northern (Arctic) Federal University, Arkhangelsk, Russia (2019.5.25) ▼ サハ固有種の家畜動物と自然の概念, 日本シベリア学会第 5 回研究大会, 同志社女子大学, 京都市 (2019.6.8) ▼ Пространства и их названия в поэзии Г. Айги, Международная научно-практическая конференция «Поэтическое и культурное пограничье/безграничье творчества Геннадия Айги», Чувашский институт гуманитарных наук, Чебоксары, Россия (2019.9.11) ▼ Rearranging Binary Opposition in Sakha Stock-raising, Northern Sustainable Development Forum, Sakha Republic Academy of Science (2019.9.27) ▼ Indigenous Species of Livestock in Sakha (Yakutia) and Adaptation to Natural Environment, The Xth International Symposium on “C/H2O/Energy Balance and Climate over the Boreal and Arctic Regions with Special Emphasis on Eastern Eurasia,” Hokkaido University (2019.10.6)

斎藤慶子 ㊦ 3 著書 ▼ 『「バレエ大国」日本の夜明け チャイコフスキー記念東京バレエ学校 1960-1964』408 (文藝春秋企画出版部, 2019.12) ㊦ 4 その他業績 (著書形式) ▼ バレエ教育と劇場システム (沼野充義、望月哲男、池田嘉郎編集代表『ロシア文化事典』416-417, 丸善出版株式会社, 2019)) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ One of the Origins of Japanese Ballet: The Example of Japanese-Russian - Polish Cultural Interchange, 第 10 回スラブ・ユーラシア研究東アジア大会, 東京大学 (2019.6.30) ▼ В поиске истоков старинной японской мелодики в русском балете конца 19 века: на примере балета «Даита» (1896, Конюс Г. Э.), XXII конференция «История и культура Японии», Институт классического Востока и античности ВШЭ, Москва (2020.2.18)

仙石学 ㊦ 1 学術論文 ▼ 旧ソ連・東欧における社会福祉・総論 (仙石学編『新版 世界の社会福祉第 5 巻 旧ソ連・東欧』1-42, 旬報社, 2019) ▼ ポーランドにおける福祉の転換: 残余型福祉からの脱却? (仙石学編『新版 世界の社会福祉第 5 巻 旧ソ連・東欧』328-348, 旬報社, 2019) ▼ スロベニアにおける福祉の転換: 普遍型福祉の終焉? (仙石学編『新版 世界の社会福祉第 5 巻 旧ソ連・東欧』350-365, 旬報社, 2019) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 2019 年欧州議会選挙: 東欧諸国の動向, *Europe Report* 6 [http://www2.jiia.or.jp/RESR/column_page.php?id=355], 日本国際問題研究所, 2019 年) ㊦ 3 著書 ▼ (編著) 新版 世界の社会福祉第 5 巻 旧ソ連・東欧, 368 (旬報社, 2019) ㊦ 4 その他業績 (著書形式) ▼ (事典項目) 旧東欧 (現代地政学事典編集委員会編『現代地政学事典』628-629, 丸善出版, 2020) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ ポピュリズム政権の経済政策: ヴィシエグラド諸国の比較から, 比較経済体制学会 2019 年度大会, 一橋大学一橋講堂 (2019.6.23) ▼ Populist Governments and Economy: Differences between PiS and FIDESZ, 2019 SRC Summer International Symposium “Global Crisis of Democracy? The Rise and Evolution of Authoritarianism and Populism,” SRC (2019.7.5)

高橋美野梨 ㊦ 1 学術論文 ▼ EU の「クジラの生と死に対する管理」とその政治的含意『国立民族学博物館調査報告 (SER)』149:175-193 (2019) ▼ (with Shinji Kawana, Kousuke Saitou, Yu Koizumi, Shino Hateruma, Ayae Shimizu) Autonomy and Military Bases: USAF Thule Base in Greenland as the Study Case, *Arctic Yearbook* 2019, 1-15 (2019) ▼ 基地政治とデンマーク『国際安全保障』47(3):35-54 (2019) ▼ The Contours of the Development of Non-Living Resources in Greenland, *Polar Record* (Special Issue: International Law for Sustainability in Arctic Resource Development), 1-10 (2020) ▼ 開発と先住民族 (田

畑伸一郎、後藤正憲編著『北極の人間と社会：持続的発展の可能性』[スラブ・ユーラシア叢書 14] 261-288, 北海道大学出版会, 2020) ㉑ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼日本のなかの北極、北極のなかの北海道『日本ネシア論 (別冊環 25)』434-436 (2019.5) ▼関係を結ぶデンマーク、解きほぐすグリーンランド：『北の果ての小さな村で』に寄せて (『北の果ての小さな村で A Polar Year』劇場パンフレット) 10-11 (2019.7) ▼犬ぞり使用可能期間短縮「北極ボードゲーム・ルールブック (ArCS プロジェクト北極域研究学習ツール The Arctic)」4-5 (2019.8) ▼グローバル資本の進出「北極ボードゲーム・ルールブック (ArCS プロジェクト北極域研究学習ツール The Arctic)」10-11 (2019.8) ▼情報インフラ整備「北極ボードゲーム・ルールブック (ArCS プロジェクト北極域研究学習ツール The Arctic)」168-171, 小島遊書房, 2019.11) ▼格差社会「北極ボードゲーム・ルールブック (ArCS プロジェクト北極域研究学習ツール The Arctic)」40-41 (2019.8) ▼化石燃料採掘「北極ボードゲーム・ルールブック (ArCS プロジェクト北極域研究学習ツール The Arctic)」54-55 (2019.8) ▼ Политическая система и устойчивое будущее в Арктике, *Вечная мерзлота и культура: Глобальное потепление и Республика Саха (Якутия), Российская Федерация*, 56-59 (2019.10) ▼グリーンランド映画を語る (『映画のなかの「北欧」: その虚像と実像』262-265, 小島遊書房, 2019.11) ▼植村直己物語 (『映画のなかの「北欧」: その虚像と実像』262-265, 小島遊書房, 2019.11) ▼ The Future of Greenland: Political and Economic Implications for the Arctic - Commentary: An International Relations Perspective, *The Arctic in World Affairs: A North Pacific Dialogue on Global-Arctic Interactions - The Arctic Moves from Periphery to Center*, 114-119 (2019.12) ▼ (大西富士夫と共著) 安全保障『これからの日本の北極政策の展望』23-26 (2020.2) ▼北極ガバナンス『北極域研究推進プロジェクト (ArCS) 2015-2020 研究成果報告書』129-132 (2020.2) (5) その他 ▼政治 玉城デニー知事提案の「SACWO」北欧に実例『AERA』26 (2019.4.22) ▼お手本はデンマーク? SACWO 設置で沖縄「辺野古ノー」実現なるか、AERA dot.2019 年 4 月 16 日付 (2019.4) ▼北欧に「SACWO」のヒントあり、OKIRON Web.2019 年 4 月 16 日付 (2019.4) ▼必読! 「世界最大の島グリーンランドを買いたい」と言い出したトランプ米大統領の大風呂敷 その真意とは、Yahoo! 記事 2019 年 8 月 17 日付 (2019.8) ▼こちら特報部 グリーンランドどんどこ? 『東京新聞』26 (2019.8.28) ▼トランプ大統領が欲しがってるグリーンランドってどんどこ? 回転すしで食べてるエンガワの産地『東京新聞』(Tokyo web) (2019.9.5) ▼ (社説余滴) グリーンランドの選択『朝日新聞』6 (2019.9.22) ㉒ 5 学会報告・学術講演 ▼クジラと北極：欧州連合の環境保全政策を事例に環境と人間の相互作用を考える、北極域研究推進プロジェクト (ArCS) 2019 年度プロジェクト全体会合、横浜 (2019.4.22-23) ▼ The Politics of Sustainability Surrounding the Development of Non-living Resources in Contemporary Greenland, ASSW: Arctic Science Summit Week 2019, Arkhangel'sk (2019.5.25) ▼グリーンランドにおける自治と米軍基地をめぐる政治：『The Influence of Sub-state Actors on National Security』から『US Military Bases and Global Power Relations』へ、北大政治研究会、札幌 (2019.7.12) ▼ Introduction to Arctic Natural and Social Sciences, International Relations: The Political Engagement of the Inuit, Hokkaido Summer Institute, Sapporo (2019.7.31) ▼ SESSION II: The Future of Greenland: Political and Economic Implications for the Arctic (Commentary: An International Perspective), 2019 North Pacific Arctic Conference, Honolulu (2019.8.15) ▼ To What Extent is the Development of Non-living Resources Compatible with the "Indigenous Knowledge" in Arctic Indigenous Communities?, 2019 年度北海道大学共同利用・共同研究拠点アライアンス部局間横断シンポジウム「計算科学が拓く汎分野研究」, 札幌 (2019.10.31) ▼ Rethinking Whaling in Relation to Ritual and Taboo: A Consideration of the Present Situation of Arctic Indigenous Societies with a Focus on Greenland, International seminar on Arctic Future, Trans-disciplinary Discussion of Transforming Arctic and Human Society, Sapporo (2020.3.9) ▼ Political Culture in Base Politics in Greenland, ISA 2020: International Studies Association 2020 Annual Convention, Honolulu (2020.3.28)

田畑伸一郎 ㉑ 1 学術論文 ▼ロシア経済に生じた異変：2018 年マクロ実績の分析『ロシア NIS 調査月報』64(5):4-25 (2019) ▼ Финансовые потоки между федеральным бюджетом и арктическими регионами России, *Регион: экономика и социология*, 3(103):3-25 (2019) ▼ロシア経済の強さと弱さ『比較経済研究』57(1):27-39 (2020) ▼ (本村眞澄と) 石油とガス (田畑伸一郎、後藤正憲編『北極の人間と社会：持続的発展の可能性』[スラブ・ユーラシア叢書 14], 45-47, 北海道大学出版会, 2020) ▼ Characteristics and Development of State Statistics (M. Kuboniwa et al., eds., *Russian Economic Development over Three Centuries: New Data and Inferences*, 43-58, Palgrave Macmillan, 2019) ▼ (田畑 朋子と) State Budget (M. Kuboniwa et al., eds., *Russian Economic Development over Three Centuries: New Data and Inferences*, 251-289, Palgrave Macmillan, 2019) ▼ (久保庭眞彰、志田仁完と) *Gross Domestic Products* (M. Kuboniwa et al., eds., *Russian Economic Development over Three Centuries: New Data and Inferences*, 335-419, Palgrave Macmillan, 2019) ㉒ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ロシア北極域の経済状況『Arctic Circle』[北海道立北方民族博物館友会の会季刊誌] 112:4-9 (2019.9.20) ▼ (大塚夏彦と) Арктика и Азия (Хироки Такакура и др. (ред.), *Вечная мерзлота и культура: Глобальное потепление и Республика Саха (Якутия), Российская Федерация* (Учебное пособие для экологического образования), 60-63, Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University, 2019)

▼(後藤正憲と) 持続的発展を目指して(田畑伸一郎、後藤正憲編『北極の人間と社会: 持続的発展の可能性』[スラブ・ユーラシア叢書 14] 1-13, 北海道大学出版会, 2020) ▼(成田大樹と) 資源開発『これからの日本の北極政策の展望』[北極域研究推進プロジェクト (ArCS) テーマ7「北極の人間と社会: 持続的発展の可能性」] 20-22 (2020) ④ 3 著書 ▼(後藤正憲と共編著)『北極の人間と社会: 持続的発展の可能性』296 (北海道大学出版会, 2020) ④ 4 その他業績(著書形式) ▼(事項項目) 極地の探検と開発(沼野充義、望月哲男、池田嘉郎編『ロシア文化事典』88-89, 丸善出版, 2019) ④ 5 学会報告・学術講演 ▼Flow of Financial Resources between the Federal Budget and the Arctic Regions in Russia, Arctic Science Summit Week 2019, Northern (Arctic) Federal University, Arkhangelsk (2019.5.24) ▼ロシア経済の強さと弱さ, 比較経済体制学会第59回全国大会, 一橋大学 (2019.6.22) ▼Strengths and Weaknesses of the Russian Economic System, The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 東京大学 (2019.6.29) ▼People and Community in the Arctic: Possibility of Sustainable Development, Northern Sustainable Development Forum, North-Eastern Federal University, Yakutsk (2019.9.25) ▼Flow of Financial and Investment Resources among Regions in Russia, The 51st Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), San Francisco (2019.11.25)

兎内勇津流 ④ 2 その他業績(論文形式) (5) その他 ▼IFLA 先住民分科会での活動とアイヌ『むすびめ 2000』107:5 (2019.6) ▼セルゲイ・クズネツォフ(兎内勇津流訳)「ソ連とロシアの歴史学における日本人のソ連抑留」Кузнецов, Сергей. Интернирование японцев в СССР 1945-1956 в работах российских авторов: библиографический указатель. Sapporo: Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, 13-20 (2019) ▼(及川琢英と)立花小一郎回顧余録(二)大正8(1919)年12月~9(1920)年4月(翻刻)『近現代東北アジア地域史研究会 Newsletter』31:43-78 (2019.12) ▼アテネ行ってきました『むすびめ 2000』109:5(2019.12) ▼(石原真衣、亀丸由紀子と)日本の図書館と先住民: IFLA2019年アテネ大会先住民分科会でアイヌ民族を取り上げるセッションを組織して『カレントアウェアネス』343: 10-12 (2020.3) ④ 5 学会報告・学術講演 ▼19世紀のカトリック教会とロシア人のカトリック観: アレクサンドル・ポポフ(1820-1877)のカトリック論を中心に, ロシア中近世史研究会例会, 明治大学 (2019.4.14) ▼ゲンナージー・ネヴェリスコイ(1813~1876)のアムール調査(遠征)とサハリン島, 函館日露交流史研究会 函館市地域交流まちづくりセンター (2019.6.23) ▼尼港事件はどのようにして起こったか: 三月とその前後, サハリン樺太史研究会第54回, 北海道大学 (2019.6.29) ▼アレクサンドル・ガーニンのコルチャク論, シベリア出兵史研究会第4回, 東京外国語大学 (2019.8.4) ▼1920-30年代の極東社会の変容: ユーリー・ピカーロフの仕事をしてがかりに, 科研費基盤研究(A)「日ソ戦争および戦後の引揚・抑留に関する総合的研究」研究会, 1930年代ソ連の極東政策とその波及, 東北大学 (2019.9.22) ▼ゲンナージー・ネヴェリスコイ(1813~1876)のアムール調査(遠征)とサハリン島, はこだて外国人居留地研究会札幌会, 北海道大学 (2019.12.24) ▼最近のフィラレート(ドロズドフ)研究に見るその教会・国家関係論, 科研費・基盤研究(A)「超越性」と「生」との接続: 近現代ロシア思想史の批判的再構築に向けて研究会・「プラトンとロシア」研究会, 九州大学 (2020.3.6)

長縄宣博 ④ 1 学術論文 ▼Elusive Piety: Hajj Logistics and Local Politics in Tatarstan, Dagestan, and the Crimea, *Religion, State & Society* 47(3):307-324 (2019) ▼帝国の協力者か攪乱者か: ロシア帝国のタタール人の場合(野田仁、小松久男編著『近代中央ユーラシアの眺望』287-304, 山川出版社, 2019)) ④ 2 その他業績(論文形式) (3) 書評 ▼Rebecca Gould, *Writers and Rebels: The Literature of Insurgency in the Caucasus* (New Haven: Yale University Press, 2016), H-Nationalism, H-Net Reviews. August 2019 [<http://www.h-net.org/reviews/showrev.php?id=54323>] ▼塩野崎信也『〈アゼルバイジャン人〉の創出: 民族意識の形成とその基層』京都大学学術出版会, 2017年『内陸アジア史研究』34:127-135 (2019) ▼巽由樹子『ツアーりと大衆: 近代ロシアの読書の社会史』東京大学出版会, 2019年『史林』102(6):93-99 (2019) (5) その他 ▼イスラームのロシア: 帝国・宗教・公共圏1905-1917『2019年度公益財団法人三島海雲記念財団年次報告書』30-33 (2019年7月5日に東京會館にて受賞講演会) ④ 4 その他業績(著書形式) ▼Liubichankovskii S.V., Dzhundzhuzov S.V., Koval'skaia S.I., et al., *Imperskaia politika akkul'turatsii i problema kolonializma (na primere kochevykh i polukochevykh narodov Rossiiskoi imperii)* (Orenburg: Izdatel'skii tsentr OGAU, 2019), 62-65, 233-239, 258-264, 359-366 (2019) ④ 5 学会報告・学術講演 ▼Nazad v budushchee? Puteshestvie v Zakaspiu i Bukharu v epokhu para i pečhati, SRC 2019 Winter International Symposium, "Tsars' Regions between Literary Imaginations and Geopolitics" (2019.12.12) ▼Revenge on the World Capitalists: How Tatars became Liberators of the East, at the 51st ASEEEES Annual Convention, San Francisco Marriott Marquis (2019.11.26) ▼文明化の使命としての内戦: 赤軍ムスリム兵士と中央アジア, 歴史学フォーラム 2019, 大阪市立難波市民学習センター (2019.9.14) ▼"Grazhdanskaia voina kak tsivilizatorskaia missiia: Rol' tatarskikh politrabotnikov Krasnoi armii v Turkestane," Mezhdunarodnyi kollokvium "Grazhdanskaia voina v Rossii: zhizn' v epokhu sotsial'nykh eksperimentov i voennykh ispytani, 1917-1922," European University in St. Petersburg (2019.6.12) ▼「ユーラシア大陸深部 2000年の旅」NHK文化センター札幌支社(村上智見・諫早庸一と全10回中4回)

野町素己 ㊦ 1 学術論文 ▼ The Postposed Definite Markers in the Gorani Dialects of Kosovo: The Evidence from Ramadan Redžepari's Literary Works, *Slavistički Studii*, 19:173-187 (2019) ▼ Za neobjavenata gramatika na makedonskiot jazik od Samuil. B. Bernštejn, *Zbornik na trudovi od meġunarodnata naučna manifestacija „Makedonistički denovi vo MANU*, 85-110" (2019) ▼ "Language Loss and Preservation: The Case of Banat Bulgarian in Serbia, *Balkanistika*, 33(1): 1-30 (2019) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ On the Language of the Second Edition of Ioann Rajić's *History of Various Slavic Peoples* (1823), *Balkanskie čtenija - 15: Balkanskij tezaurus: komunikacija v složno-kul'turnyx obščestvax na Balkanax*, Moscow (2020.3.27) ▼ (招 請) (Robert Greenberg と) Classifying the South Slavic Languages: The Case of the Gorani Slavs, *The Politics of Categorizing Linguistic Varieties*, Wellington (2019.7.13) ▼ (Yaroslav Gorbachov と) Existential Clauses in Kashubian: A Historical and Typological Analysis, *Slavic Linguistics Society*, Potsdam (2019.9.13) ▼ (Yaroslav Gorbachov と) Existential Clauses in Kashubian: A Historical and Typological Analysis, *Posiedzenie Komisji budowy gramatycznej języków słowiańskich przy Międzynarodowym Komitecie Slawistów*, Warsaw (2019.9.19) ▼ Language Ideology and Language Standardization in Serbia before Vuk Karadžić' Reform: The Case of Joann Rajić and His Successors, *ASEEES 51*, San Francisco (2019.11.26) ▼ (招請) How Do Russians Verbalize the Art of Kissing? An Appendix to Jurij D. Apresjan's Analysis of the Verb Celovat' 'to Kiss', *Konferencija v čest' 90-letija Jurija Derenikoviča Apresjana*, Moscow (2020.2.4) ▼ Will Old Scripts Be Back Again: Aspects of Script Usage among South Slavs Today, *Instytut filologii słowiańskiej, Uniwersytet Adam Mickiewicza w Poznaniu*, Poznań (2019.6.11) ▼ Old Scripts Meet New Context, *Institut slavjanovedenija RAN*, Moscow (2019.12.12.24)

ブフ・アレクサンダー ㊦ 1 学術論文 ▼ Territorial Disputes in Asia (猪口孝編, *The SAGE Handbook of Asian Foreign Policy*, 2:340-360, London: Sage, 2019) ㊦ 3 著書 ▼ *These Islands Are Ours: The Social Construction of Territorial Disputes in Northeast Asia* [Security in Asia Series], 232 (Stanford University Press, 2020) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ (基調講演) Post-truth World and the Role of East Asian studies, *Joint East Asian Studies Conference*, University of Edinburgh (2019.9)

みせらねあ

◆ センターの役割分担 ◆

2020 年度のセンター教員の役割分担は以下の通りです。[岩下]

センター長.....	岩下
副センター長.....	仙石
拠点運営委員会委員.....	岩下/宇山/仙石/長縄/野町
【学内委員会等】	
教育研究評議会、部局長等連絡会議、部局長等意見交換会.....	岩下
教務委員会.....	岩下
図書館委員会.....	兔内(仙石)
国際担当教員.....	ウルフ
RJE3 学内運営委員会およびカリキュラム検討専門委員会.....	田畑/安達
低温科学研究所拠点運営委員会.....	岩下
北極域研究センター運営委員会.....	田畑
男女共同参画委員会.....	岩下
社会科学実験研究センター運営委員会.....	田畑
サステナブルキャンパス推進員.....	安達
ハラスメント予防推進員.....	宇山
広報担当者.....	野町

共同利用・共同研究拠点アライアンス運営委員.....	安達
欧州ヘルシンキオフィス所長.....	田畑
【学外委員会等】	
国立大学附置研究所・センター会議.....	岩下
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会.....	岩下
JCREES 事務局.....	岩下/諫早
地域研究コンソーシアム理事.....	岩下
地域研究コンソーシアム運営委員.....	安達
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員.....	宇山
京都大学東南アジア地域研究研究所運営委員.....	岩下
ICCEES 情報.....	野町
【センター内部の分担】	
大学院講座主任.....	宇山
教務委員.....	長縄
入試委員.....	長縄
総合特別演習担当..... (前期) 宇山/ (後期) 仙石	
全学教育科目責任者.....	長縄
全学教育科目総合講義.....	諫早
全学教育科目演習.....	長縄
将来構想.....	宇山/仙石/田畑/長縄/野町
点検評価.....	田畑/長縄
夏期シンポジウム.....	岩下/加藤/諫早/非常勤研究員*
冬期シンポジウム.....	宇山/諫早/非常勤研究員*
図書.....	仙石/兔内
情報・広報.....	野町/諫早/大須賀
予算.....	田畑
共同利用・共同研究公募.....	仙石
客員教員.....	田畑
外国人研究員プログラム.....	安達/ウルフ/大須賀
サーヴィン.....	宇山
メルクソー.....	岩下
ラドチェンコ.....	ウルフ
デブラシオ.....	安達
非常勤研究員.....	仙石
中村・鈴川基金.....	仙石
公開講演会.....	長縄/諫早/非常勤研究員*/大須賀
専任研究員セミナー (助教・非常勤研究員セミナーを含む).....	田畑
その他研究会・講演会.....	安達/諫早/非常勤研究員/大須賀
博物館展示.....	加藤
NIHU 北東アジア (NIHU セミナー、HP、オンライン報告書).....	加藤
UBRJ (HP、『境界研究』).....	岩下
その他諸行事企画.....	安達/諫早/非常勤研究員
雑誌編集委員会.....	安達/宇山/ウルフ/長縄/野町

Acta Slavica Iaponica.....野町／ウルフ／大須賀
『スラヴ研究』.....長縄／大須賀
スラブ・ユーラシア叢書、SES、研究報告集.....安達／大須賀
ニューズレター和文（メルマガ・HP コンテンツ）...宇山／（岩下）／大須賀
ニューズレター欧文（メルマガ・HP コンテンツ）ウルフ／（岩下）／大須賀

*非常勤研究員2名で担当するなかでの代表者を示す。2名の名前がある場合は輪番制。

◆ 研究員消息 ◆

田畑伸一郎研究員は、11月22～28日の間、51st ASEEEES Annual Convention 出席・研究報告・討論のため、アメリカ合衆国に出張。12月10～14日の間、北海道大学欧州ヘルシンキオフィス管理業務のため、フィンランドに出張。3月9～20日の間、北海道大学欧州ヘルシンキオフィス管理業務のため、フィンランドに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は、10月12～26日の間、資料収集のため、アメリカ合衆国に出張。11月6～11日の間、カンファレンス出席および資料収集のため、オーストラリアに出張。11月22日～12月2日の間、51st ASEEEES Annual Convention 出席・研究報告および資料収集のため、アメリカ合衆国に出張。2月26日～3月8日の間、資料収集のため、アメリカ合衆国に出張。

岩下明裕研究員は、11月10～27日の間、資料収集のため、中国に出張。12月5～14日の間、資料収集のため、中国に出張。1月11～13日の間、“北東アジアをめぐる日韓の対話：平和、安全保障、エンパワーメント”参加のため、韓国に出張。

野町素己研究員は、11月23日～12月1日の間、51st ASEEEES Annual Convention 出席・研究報告および研究打合せのため、アメリカ合衆国に出張。12月22日～1月1日の間、資料収集および講義のため、ロシアに出張。2月2～8日の間、カンファレンス出席および研究打合せのため、ロシアに出張。

長縄宣博研究員は、11月22～28日の間、51st ASEEEES Annual Convention 出席・研究報告のため、アメリカ合衆国に出張。

宇山智彦研究員は、11月16～21日の間、国際会議「ロシア東方における内戦」出席・報告のため、ロシアに出張。11月22～28日の間、51st ASEEEES Annual Convention 出席・研究報告のため、アメリカ合衆国に出張。

（前々号からの続き）[事務係]

目 次

新センター長から	1
研究の最前線	1
2020 年度夏期国際シンポジウム《北東アジア——歴史と未来・発展と摩擦》 開催予告／第一回 NIHU-UBRJ セミナー (ZOOM) の開催／北極域研究加速プ ロジェクト (ArCS II) の開始／2020 年度中村・鈴木基金奨励研究員決まる／ 2020 年度特任教員 (外国人) 決定 (滞在日は未定)／専任・非常勤研究員セ ミナー／研究会活動／	
人事の動き	7
研究員の異動／事務職員の異動／2020 年度の客員教授・准教授	
宣言・文字・アイデンティティ：2018 年のボスニア訪問の思い出 ...	8
by 野町素己	
札幌での日々	14
by エウゲーニ・ドブレニコ	
日本中央アジア学会大会オンライン開催顛末記	16
by 宇山智彦	
学界短信	19
学会カレンダー	
大学院だより	20
編集室だより	21
ACTA SLAVICA IAPONICA / 『スラヴ研究』 / EURASIA BORDER REVIEW / 『境界研究』	
会議 (2020 年 4 ～ 5 月)	22
誰が 何を どこで	23
みせらねあ	29
センターの役割分担／研究員消息	

2020 年 7 月 1 日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	岩下明裕
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
